
箱愛

ムトウ ハガネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱愛

【Nコード】

N5873E

【作者名】

ムトウ ハガネ

【あらすじ】

平凡な主婦、平凡な幸せだった。興味本位から始めたテレホンレディーの仕事。現実はことごとく崩れ、ことごとく堕ちた。そして果てには……。

記憶のかげら

黄色点滅信号、激しく行き交う車、元気に響き渡る子供達の声。その中に二人の生活は小さく存在し、そして……。

結婚してしばらくは子供に恵まれなかった。ずっと販売の仕事をしていたからそのまま何となく仕事を続けていた。

旦那は三交代勤務の仕事で不規則な生活を送っていた。どこにでもあるような平凡な家庭生活、平凡な私だった。

仕事にやる気を見入らせなかった私は同じ職場の女の上司に何考えてんだかよくわからない女という陰口をたたかれ始めたと同時に何の未練も無くあっさりと仕事を辞めてしまった。

しばらくは、はつらつと働く姑の反応なんかも気にはしていたがそれはすぐに解消された。

私は妊娠したんだ。

つわりはことのほかツラかった。

それを乗り越えたとどこまでもどこまでも太った。

きれいなマタニティー生活なんて全く頭になかった。

やがて私は無事男の子を出産した。

子供はことのほか可愛かった。

溺愛という言葉の意味を身をもって知ったのだ。

それと共にだんだんだ旦那のことが煩わしく思えるようなそんな日常になっていた。

長男が三歳になるうかという頃、二人目を妊娠。

同じようなマタニティー生活を過ごした後、待望の女の子を出産。ますます育児に明け暮れた。

県営住宅には住み慣れてきてはいたけど仲の良い付き合いも無く、仲の悪い付き合いも無く

要するに親しい知り合いも友達もいなかったんだ。

県営住宅のそばには閑静な住宅が並び、まわりはキレイに歩道が整備されていて、それは広い公園、図書館、スーパーなどへと繋がり、毎日天気さえ良ければ子供と私は散歩に出かけた。

散歩からいつものように帰ってきたところで、我が家の下に住む奥さんが声をかけてきた。

その奥さんとは挨拶程度であまり話もしたこと無かった。

その奥さんにはまだ子供がおらず同じ棟内に同じくらいの年齢で同じく子供のいない奥さんとすごく親しげだった。

後で聞いたところによると二人共、不妊の悩みをかかえていたらしい。

『大きくなつたね。』

話かけられた日から、何となくちよくちよくと会話をするようになって、そのうち一緒に買い物に出かけたりお互いの家を行き来するようになった。

旦那のことや家族のことまで結構いろいろ話せる仲になっていった。私は彼女の清野という名字からキヨちゃんと呼ぶようになり一層親しくなっていた。

キヨちゃんはいつもほぼすっぴんでほんとに色白で肌がきれいだった。

ぽっちゃりとしてて丸っこいメガネをかけて優等生タイプのおとなしい印象の女性だった。

家の中も整然としていて私からは大変優秀な主婦の代表に見えた。

『じゃ、そろそろご飯作んなきゃ。またね。本日もお邪魔しましたあ。』いつもの調子で

重い腰をようやく上げた私にキヨちゃんが

『なあなあ、あやちゃん。レディコミってしつとる?』って聞いてきた。

（レディコミ・・・マンガ？）

『なんか・・・そのスーパーの端っこにあるマンガ？』

『うん、そうそう！！ちよつと・・・てかエッチなやつ・・・読んだことある？』

『ない！！』

『読んでみるう？』いたずらっぽい眼差しでキヨちゃんが聞いてきたと同時に私は

『読みたい！！』即答した。

レディコミごっそりの紙袋を片手に子供の手を引き、私は家に帰った。

キヨちゃんとレディコミ・・・全く似つかわしくない関係。

キヨちゃんはエロとは関わりを持たない。

そんなオーラを放ってるふうに見えたのにな。

旦那には見つかったちゃいけないと思いながら押入れの隅に紙袋を隠し、夕飯の支度をした。

なぜかすごくワクワクして楽しい気分でした。

初めて開くレディコミはやたらめったらエロい雰囲気をかもし出した。

内容はモチだけどこれをキヨちゃんが読んでたわけだ。

そして私が借りてこうして見てるってこと。

エロ気分MAXに突入した。

一冊、二冊と見るうち、しつこく出てくる広告。そのうちレディコミの内容よりも

その広告内容に自然と私は吸い込まれていった。

（在宅の仕事　テレフォンレディー　お気軽にお問い合わせください・・・これって

何？）

興味を持ち始めたらどんどん気になり始めてもう止まらなかった。

24時間受付・・・旦那が夜勤の日を待つて私は電話をかけてみることにした。

心臓の鼓動が聞こえてきそうなどきどきの中、私は電話をかけた。
(どんなものなのか聞いてみるだけ。聞いたらそそくさと切つてしまおう。)

2、3回の呼び出し音の後

『はい。こちらコールセンターです。』

事務的な男性の声。

(うわっ!!男の人!?まいったな・・・)

即効がちゃ切りしたい自分を半分抑えながら

『あつ、あの・・・お仕事の広告を見て・・・』

『はい。レディコミか何かをみられてですか?』

『えっ、はい!!』

『有難うございます。それでは早速ですがお名前を?』

『あつ、はい!!!神野です!!』

(とつさに本名いつちまった!後悔!!)

『下のお名前もお願いいたします。』

『神、神野あや子です。』

『神野あや子さんですね。お住まいはどちらでしょうか?』

『県名のみでかまいません。』

『岡山です。』

(なんでそんなに矢継ぎ早に質問してくんの)

『それでは年齢をお願いします。』

『えっ、あゝ26・・・です。』

ここらでヤバイと思った私はとつさにさば読みした。

『それでは干支を?』

(え・え・え・え・えとぉー!!!!!!)

『・・・わかりません。』

『・・・あ、そうですか。えっとあ、一応これで受付ということ。明日、担当者のほうから直接お仕事内容等お聞きください。』

明日お電話差し上げてもかまいませんか？』

（ンゝもう！！どうにでもなれゝ）

『○○○○ー22-○○○○です。』

『こちらは岸田と名乗りますので。よろしくお願いします。』

『あつはいつ……。よろしく願います。』

電話を切ったのに一層心臓はバクバクしてた。

（な・なんだったんよつ。一体……。明日電話かかってきたら断ろつ。）

その夜はなかなか寝付けなかった。

次の日の午前中、岸田と名乗る女性から電話がかかってきた。

『昨日はお電話有難うございました。早速お仕事についてのお話なのですが』

失礼ですけども年齢の件ですが……。』

（いつ、いたいっ！！）

『本当の年齢をお聞きしても良いですか？』

『あつはい……。29です。』

『干支は？』

『戌です。』

『……。どうして昨日は嘘つかれたんですか！？』

明らかに怒ってるような口調だった。

『あつ、初めてで……。動揺しちゃいまして……。すみませんつ。』

『

『そういうことされますとお仕事して頂けなくなるので……。』

これからはやめてくださいね！！』

『あつはい。すみません！！』

『それでは……。』

それからの彼女は本当に親切丁寧に仕事内容を説明してくれた。

・・・何か質問等ありますか？・・・初めてなのでやってみないとわからない部分もあると思うのでそんな時はいつでもコールセンターに電話をしてくださいね。』

その日を境に我が家の平凡な電話は私の大事な秘密の仕事道具となった。

昨日と今日

人間とはおかしなもので、ちょっとした変化でまるで昨日とは別人のような気分になれるんだね。まだテレホンレディーの仕事しても無いのにさ。なんだかすごいハリが出たような。育児ばかりしてるわけにはいかない・・・お仕事もこなさなきゃねえ　るるる♪
みたいな鼻歌でも出そうな気分洗濯物を干す私がいた。ベランダから下を覗くとキヨちゃんが布団干ししてて、

『おはよう！！』

と挨拶した。

旦那は今、夜勤だから朝から夜までは家にいる。夕方までは確実に寝てるわけだけど、さすがに旦那いたら出来ないな。そして子供の様子にもよるし。

決行は今夜遅く。子供が寝て旦那が仕事に行ったその時だ。

はやる気分を抑え、主婦としての仕事をこなす。

いつもの日常になんかの変わりもなかった。

でも昨日の私と今日の私。違うんだなあ。全くね。

そして深夜・・・その時はやってきた。

改めてみたらきつたないメモ書きだった。コールセンターの女性が

『お仕事の際のお電話番号を申し上げますね・・・』

とゆーから慌てて用意して必死に書いた番号。私専用の暗証番号も・・・。

仕事のやり方も必死で聞いて何となく頭では理解は出来てる。

だけど実際、受話器をとるとすごいきどき感。そして心臓もバクバク。

それと同時に日中は思わなかった戸惑いというか、ほんとにいいのかな・・・

みたいな迷いの気持ち半分くらい出始めてきた。

仕事といってもあやしい、ヤバイってのは確実にかもしだしてるも

んね。

受話器をとり・・・置く・・・そしてまたとり・・・

何回か繰り返してたけど

（仕事だよ！！あくまでね・・・仕事仕事！！）

と思うとまたフツと変な根性が出て、やっとかけることが出来た。

でも心臓のバクバクは健在。3回くらいの呼び出し音の後に

ぱかーん！！とびっくり箱が開いたのごとくその世界は出てきた。

『はあゝい お電話あつりがとうございまあゝす！！！！さあーて本日もお

素敵な男性とワクワク ときどきのおゝ・・・』

すこぶるテンションがハイそしてマックス到達な可愛い女の子の声とともに

音割れお構いなくかかる音楽。圧巻されつつ、しばし聞き入ってしまっ

（女の子のしゃべってる途中に番号押しするんやっただけ？）

番号押しでシャープ。すると音楽が切り替わり、やっぱりさっきの女の子が

出てきた。

『お仕事ご苦労様ですっ さて今月はあ・・・』

彼女は今月のこころ辺が稼ぎ時だとかいろいろポイントらしきことを説明してくれて最後に

それじゃ今月も頑張ろうねゝ！！』

と喝をいれてくれた。てんぱってた私もだいぶ気分が落ち着いてきた。

と同時に違う女の人が出てきて

『それでは男性と会話する方は1シャープ。伝言は2シャープ・・・』

『
淡々とお仕事開始モードにうながされた。

（ちよっ・・・ちよっ・・・ちよつとまじで？！話が伝言だね・・・えゝつと・・・

と、とりあえず手っ取り早く話だ！！）

1 シャープ押す。

しばし沈黙の後、また音割れお構いなしの音楽がスタート。
ほっとしたのもつかの間、いきなり

『男性とつながりました！！』

って聞こえたかと思ったら

『もしもし・・・もしもし・・・』

低い洪めな男の人の声がした。

（え、えええええっ！！！！と）

『あつ、えつと・・・』

すごぶる緊張。せいいつっぱいカワイ目に

『もしも・・・』ピツって音がしたと同時に

『お相手が変わります。』という女性の声。そしてまた音楽。

（なっ、なんなんよお！！最悪！！）

そのままガチャ切りした。

なんだかものすごくやな気分だ。

だけどそれがテレホンレディとしての最初の一步だった。

旦那の勤務体系、子供の様子ではかどってるのか、いないのか・
・仕事として成り立ってんのかさえわからない。

だけど私はテレホンレディーとして時間さえ空けば受話器を握り締める生活をはじめていた。

一時間、それ以上、音の悪い音楽をきいて誰一人として繋がらなかったり、やっと繋がった相手に即ガチャ切りされるなんて、もう当たり前になっていた。

そうかと思えば自分の自慢話で二時間も三時間もしゃべるおっちゃんもいる。

すごい性癖のある三十代くらいの男の話を聞いてたら、ほんとに途中気分が悪くなって吐き気がした。

親しげに話してくる気のよさそうな兄ちゃんと仲良く話し込む。だんだん話が盛り上がってきたところで

『ところでなあ、彼氏はおるん？』

つてたずねられた。

『彼氏？いまおらんよ。』

『・・・・・・・・・・。』

『もしもし・・・・・・・・どしたん？もしもし・・・・・・・・』

『おいこらあ！！このドブスがあ！！てめえみてえな・・・・・・・・』

《いきなり態度豹変型ヤロウ》

最初はかなりびっくりして落ち込みもしたが

この仕事にはかなりこの型の男がいることがわかった。

仕事始めから一週間程度だったが顔の見えない男達に様々な洗礼を受けた。

受話器を当て過ぎて耳がジクジク痛んだ。

そしてとにかくこの仕事にはある程度の免疫をつけることが必要だと悟った。

次第にどんどんストレスが蓄積されていくのがわかった。

日中は上の子が保育園にいき、その間に下の子が寝てくれた場合、仕事をする。

寝てくれない日は家事育児に専念。旦那がいる場合は全く休業。夕方から子供二人が寝てくれて仕事始めたら、すごく長く話してくれる人と繋がって

洗濯物は取り込めない、夕飯の支度も出来ないなんてこともあった。《すごく長く話してくれる人》

話す内容なんてどうでもいい。何でもいい。

テレホンレディーに必要なのはこの人だった。

だけどそうそういるわけじゃない。つかんだら絶対離さないこと。

だけど夜中にこの人と遭遇するとつらいんだな。次の日ね。睡眠不足でふらふら。だけど子供を送り出さなきゃ、そしたらすぐ夜勤明けの旦那が帰ってきて朝ご飯の用意、洗濯物して・・・。

悶々とした気分で家事と育児、そして仕事をこなしてた。

だんだんとツーショットに嫌気もさし始めたときに今まで手をつけずにいた

伝言というものがあることに気づいた。

ツーショットばかりに気をとられてすっかり忘れてた。

相手と直接話さなくていい、時間も気にしなくてもいい・・・。

実際始めてみるとツーショットより私には合ってる気がした。

ツーショットの洗礼をうけて、やめちゃおうかと思う心がとりあえず消えた。

伝言は相手も私もBOX番号なるものを持ち、その番号でやり取りする。

だけど結構な人数とやり取りするわけだから相手を間違えたり、誰が誰だかわからなくなったら仕事にならない。

最初のうちはメモ書き程度でも十分間に合っていたが、うまくいき始めるとおっつかなくなってきた。

そこで《お仕事帳》なるものを作った。

マメなことは好きだったから見やすく整理したり書き込むことが出来るようなスペースなど

構成はなかなかの出来栄えだったと思う。

そうなるとう度は

（ここまでやってほんとにちゃんとお金はもらえるのか・・・もしかしたら詐欺??）

なんて不安が出てきた。

ただとお給料日と言われた日、疑心暗鬼ながらも銀行へ行き指定した口座に入金された金額を確認できた瞬間、

もう私には迷いも戸惑いもなくなったんだ。

沢山の伝言の中に興味を引く相手がいないわけではなかったけど、私は伝言の中で架空の人物として過ごし、順調に抜け出していた。

そして表面上は今までどおり普通の主婦だった。

『あのお!!もしもし・・・。サクラさんは、ずっとたいおことわりだから!!本当に出会い求めててえ・・・。だから絶対お断りです!!!名前はかずに言います。よろしく願います。』

男の子にしては可愛い声だったしかなり若い子みたいだった。

中でもひとときインパクトがあった。

《698》かずや

私のノートにかずやが記された日。

そこから私の運命は暗闇のずつとずつと底深く歩みだしていたんだ。

質問

本日は全面休業。旦那が夜勤明けの二連休だ。
旦那の睡眠の邪魔をしないよう天気がいいので子供と散歩に出かけた。

多分手に入らないであろう、様々な一戸建てを品定めするように眺めながらベビーカーを押して歩く。
この時間はなかなかの至福だった。

我が家の玄関に繋がる階下に到着したと同時に、窓が開きキヨちやんが

『おかえりいゝー!!』

『パン焼いたんよお。食べにおいでや。』

こりやまた最高の笑顔で最高のおもてなしだ!!

『行くう!!』 即答したものの、

(そうだ!!アレかえそ!!)

とりあえず子供だけキヨちゃんの家についで、我が家に戻った私は、例の紙袋を手に

キヨちゃんの家へおりていった。

玄関を開けると、そこはおいしそうなパンのにおいが充満していた。テーブルの上のお皿にはいろいろな形の小ぶりのパンがキレイにならんでいた。

さすがキヨちゃん!!主婦の鏡だね。

子供達はすでにおいしそうにパクついている。

紙袋をテーブルの下に置き、座った。

キヨちゃんに勧められて、パンをほおばる。

最高にうまい!!...やばい!!なんて言葉、当時はもちろん使ってなかったけど

今思い出してもやばい!!

一息ついたところで私のほうから

『ありがと。レディコミ・・・返すの遅れてさ。』

『えんよお。』キヨちゃんは笑った。

『・・・あのおキヨちゃんがレディコミって・・・ちよっと・・・最初びつくりした・・・』

『私さあ・・・ちよっと旦那とのHがなあ。物足りんというか・・・』

・
不満なんよな・・・』

とキヨちゃんが言った途端、私の頭にキヨちゃんの旦那がぼわ〜んと登場した。

ちなみにキヨちゃんの旦那はなかなかのイケメンであった。

ウチの旦那もだいたいそのような定評を頂いてはいたが
なにせキヤラ濃い！！ジューズなら100%果汁タイプなのだ。

キヨちゃんの旦那は濃縮還元タイプ。

そして少しインテリな雰囲気を漂わせていた。

挨拶程度しかしてないけどね。

『あんなあ・・・あやちゃん・・・ちよっと・・・いろいろ質問してもえ〜？』

『ええけどお・・・な、何？』

キヨちゃんは少し体を前に出して

『旦那さん前戯ってちゃんとしてくれてる？？』

『・・・・・・』

『エッチの時？』

（思わず聞き返す自分が情けない・・・。）

『うん。』

テレホンレディは質問をうけるのも仕事だ。

『ねえ〜いつも旦那はどんなふうにしてくれんの？・・・』

何回聞かれたことだろう。最近は

（はい、毎度！！）

聞かれてまごつくこともない。

相手はありふれた答えはうんざりするほど

聞いてるはずだ。いかに刺激があつて興味をひきつける答えをかえすか……。

なのに……なのに……私は答えを待つキヨちゃんを前に完全にまごついている。

『う、ウチの場合はちゃんと……する。……』

『旦那は全然無し！！少し触ったりはあるけど。なんかそんなてさみしくない？』

『まじでえ？ウチはけっこうねちっこくて……。もっ！ちよつと控えてくれてもいいかなって感じに……。』

それからはキヨちゃんとお互いエッチ談義で終始盛り上がり、時間はあつという間に過ぎていった。

多分キヨちゃんはあるのままを話し、聞いてみたかつたであろう質問をいろいろぶつけてきた。

わたしはそれにありのまま答えたのだがキヨちゃんはとても熱心に興味深そうに聞いていた。

キヨちゃんがレディコミを購入し愛読していた経緯は何となくわかつた気がした。

レディコミの感想を聞いてきたキヨちゃんにテレホンレディの件は話さなかつた。話す気もなかつたけど。

もしあの時話してたら……。

キヨちゃんはなんといったらう。

キヨちゃんに話していたら……。

私の運命は少しでもかわつてたのだろうか……。

変化

伝言が数件返ってきていた。

私の場合、同じ相手と大体やり取りが二往復くらいで終了。

それでも十分な結果だ。たいてい相手は自分の携帯番号を入れてきて直接かけてくるようにという。もちろんかけることはない。

そこで終わるというパターンだ。

忘れた頃にまたガラリとキャラを変えて、以前の伝言相手にメッセージを

送ることも出来る。

相手はいくらでもいる。

次から次へと渡り歩くのだ。

かずやにも、もちろんメッセージを送っていた。

サクラにはかなり過敏そうだったが・・・。

『返事有難う！！カズヤです！！えつとあゝ・・・』

偽名を伝えてはいたけど、あえてカズヤは

『おねえさん』と私を呼んでいた。

年齢は23。大学を辞めて今はアルバイト生活を送ってるらしかった。

私は、『年上だけどこまわらないの？』とか『どんな仕事なの？』

とか、ありふれた質問を返したのだが

かずやからは、今はカメラマンの助手をしていて市内のいろんな幼稚園に

行ってるとか、子供が大好きだとか返事が返ってきて

そこからまた私はかずやに質問した。

するとかずやはまた返事を返し・・・。

そんなことを繰り返しながら、知らぬ間にかずやとどんどん回数を重ねていた。

気がつけば毎日かずやは何かしらのメッセージをくれて私も

それに答えた。

かずやからのメッセージを心待ちにする自分がいた。
次第に日常の私の頭の中でかずやという人物を思い描くようになってしまった。

（まずいよ……。これは……。）

自分でもわかっていた。

そろそろかずやを切らなければ。

かずやと伝言するようになって、仕事としての他の伝言が見事に手抜きになっていた。

仕事は仕事だ！！

その夜から、かずやへの伝言を断った。

二日ほどすれば、かずやは私をやっぱりサクラとみなし

また次の相手を求めて伝言の旅に出るだろう。

皮肉、罵声あたり、返ってくるかも知れないな。覚悟のうえだ。慣れる。

お仕事帳を開き、698 かずや の横に

もう関わらないこと。サクラと確信されているから。

と記入した。

そしてサクサクとたまっている伝言をこなした。

偶像

その夜から旦那は夜勤だったから、子供が寝るのを待って久しぶりツーショットで

稼ぐ作戦に出た。

だけど伝言が……。気になって気になって……。。

結局伝言へと入ってしまった。

698 かずや から伝言が入っていた。

『今日はどしたんかなあ……。心配してます。』

体調でも悪くなったんやないかと思ってるんやけど……。

それやったら無理せんでえーからね。おねえさんからの返事いつでも待ってます。』

(ごめんね……。さよなら。)

そしてひたすら、つらつらと。ひたすら時間をかけながら。

たわいもない会話の波のなかに身を沈めていた。

次の日もかずやは頭から離れずにいた。

私の頭の中にはすでに、かずやという偶像が出来上がっていて

私はその偶像をいとおしく思い始めていたんだ。

その日もかずやに伝言することはなかった。

ただどかずやのことは片時も頭から離れなかった。

(どうしてるかな……。かずや。もう仕事は終わってるだろうけど・・。)

結局夜になると、かずやからの伝言が来ているのか気になってどうしようもなくなり

確かめずにはいられない自分がいた。

かずやから三件伝言が来てた。

『おねえさん・・・オレ・・・なんか気に障るこというてもーたんなかな?・・・』

仕事しよつても、ずっと一日おねえさんのこと考えてもーて・・・返事くれたら・・・元気になれるんやけど・・・今はめっちゃオレ・・・

情けないけど・・・落ち込んでます・・・。

『・・・もしかして、返事がもう来ないなんてことではないよね・・・。』

おねえさん・・・返事ください・・・お願いします。』

『このままってのは嫌だから・・・。嫌われたんなら嫌われたでかまわんけん。』

なぜなんかが知りたいです。返事だけはください。お願いします。・・・。

耐えられなかった。耐えれそうにもなかった。

かずやに返事を返した。

『・・・。私は結婚していて子供もいて・・・家庭があつて・・・。今まで嘘だらけでした。ごめんなさい。かずや・・・げんきでいて・・・。』

ありがと、さよなら・・・。

かずやからの返事

『おねえさん、ほんとのことゆーてくれてありがとう。ここところオレもいろいろ考えてて・・・。もしかしたらそういうこともあるんやろつと・・・。』

それでも・・・。好きで・・・今めっちゃ・・・おねえさんにあいたいと思う。』

かずやと結局終わらせることは出来なくなってしまった。終わりたい
くない気持ちだった。

会いたい！！会ってみたい気持ちを抑えることも出来なくなってた。
私の都合のいい日・・・かずやが休みを調整して会う約束をした。
そして来週の月曜日・・・かずやと会える。

かずや

月曜日11時半。

かずやとの待ち合わせ。

実家から母に来てもらい子供達を見てもらった。

子供が出来て初めて一人だけのお出かけ。

母は快く引き受けてくれた。

多少心が痛んだけど、かずやに会える嬉しさにかき消された。

かずやは二人乗りのスポーツカーに乗ってるらしかった。

『ツレには、ぜったいお前は軽四が似合うっていわれてんけどねえ

』

っていつてたつけ……。

私なりに精一杯オシャレした。完成度はけっこう高いんじゃないかな……。

待ち合わせ場所を決めるのが大変だったのだけど、私の住んでる県住から程近い場所に小さな

小型機専用の飛行場があつて当時はなんだかさびしい雰囲気で日常は一般の人ってほとんど見かけないようなところだったから、そこらあたりにしようって。

少し距離あるけど、待ち合わせ場所まで歩いていく。まあ、めっちゃドキドキしてる。

こんな感覚、最近忘れてた。

飛行場が近づく。駐車場の入り口あたりに黒いスポーツカーが横づけされてる。

多分かずやはもう私に気づいてるはず。

ドキドキドキ……。

助手席側、車の真横に立った時、男の人がこっちを向いてペコって頭を下げた。私も反射的に。

この人が……かずや！？

私の頭の中の偶像はもろくも崩れ落ちた。

ち、ちがう……。

車に乗るべきか、引き返すべきか……さあどっち???

かずやが体をのばして車のドアを開けた。

とりあえず……とりあえず……乗るべき……かな……。

乗り込むとそのまま車は走り出した。

……。

『はじめまして』

声は間違いなくかずやだ。

『あ……。はじめまして……。』

お世辞でもセンスがいいとはいえない服。

ちゃんと食べてんの？ってくらいやせてる。

目ほそ……。ちっこい……。

偶像とのギャップに戸惑いを隠しきれない私は

かずやの話をちゃんと聞く余裕などなかった。

ただ免許とってから縁が無かったMTを上手に操る

かずやの手だけはしっかり見てたのを覚えてる。

かずやはものおじすることも無く、良く話してくれた気がする。

そして車は知らぬ間に渋川海水浴場に着いた。

『歩こうや。』とかずやは言った。

『う、うん。』

車から降りて歩き出すと

かずやは私と手をさりげなくつないだ。

小さい手に感じた。

なんかきゃしゃで男の子というより女の子とつないでるような

不思議な感覚。

私よりずつとかずやはよくしゃべった。

そしてとうとう聞いてほしくないことを聞いてきた。

『どう？会ってみて……。』

『う、うん。優しそうな感じ。やっぱりかずや……。』

（うそじゃない・・・。たしかにそう・・・。）

『オレは会えてメチャ嬉しい。これからも仲良くしてな。』

『うん。』

砂浜をひたすら歩いて、かずやはボロいスニーカーに砂が入ったと
いって

一生懸命、砂をはらっていた。

（ど、どうなんよ・・・その靴。）

お金はどうみてもなさそうだった。

ひとしきり散歩して

『これから・・・どないする？』

って聞かずやに

『今日は、とりあえず・・・あまり長くは・・・。ごめんね。』

『そつかあ・・・残念！じゃ、また来た道かえろ。』

かずやはつないだ手をふざけて大きく振った。

帰りは私も少し、本物のかずやと打ち解けて

行きよりずっといっぱい話をした。

不思議と最初の戸惑いは消えて、また会いたいなって思う自分に変
わってた。

そう思い始めたのに車はもう家の近くに到着していた。

『これ携帯の番号。もう直接でいいでしょ。仕事中は留守電にして
るけど

いつでもかけてきて。』

『うん。わかった。ありがと。』

『かずや、今日はほんとに・・・』って

言いかけた私をかずやが、ぎゅっと抱きしめた。

私もかずやをぎゅって。

かずやのキスはめっちゃ優しかった。

かずやはなんだか甘いにおいがして、

そのままずっと抱きしめられてたいとおもった。

そして私の心は忘れてた感情を取り戻し生き生きとよみがえったの

だ。

現実

次の日から、かずやの携帯に連絡をした。

『はい、沢本です。ただいま仕事中で電話に出られません。留守電に・・・』

（名字、沢本ってゆーんだ。）

その夜、

『沢本君!!』

って呼んでみたら

『なあーんか恥ずかしいな・・・』

ってかずやは照れた。

旦那が仕事に出ている夜、子供が寝るとすぐにかずやに電話をした。かずやとはもういろいろなことを話せていたし、かずやは私のことをおねえさんと呼ぶこともなくなって

『あや』と呼ぶようになった。

『かずや、伝言でけっこう会ったりしてたの?』

『いーや。全然っ!!。ポカされてばかり!!』

『でもさあ・・・。少しはなんかあった??』

『・・・。どうかな。』

『ききたい!!。教えて!!』

『・・・。』

『かずや!!はやく!!』

『けっこうラッキーなこともあったかな。会えたときはね、

オレ、なんでかしんないんだけど絶対その日にHできてたんだよ。』

『・・・。』

『あや・・・。もしも?・・・。あや???』

『そうなんだ・・・。なんか・・・最低・・・。』

『あや!!!!ごめん!!!!あのさ・・・。』

そのまま受話器を投げつけるような感じで電話を切った。
涙があふれてとめどなく流れた。

（なにやってんだ私・・・。）

それからかずに電話をすることはなかった。
かけようという気になれなかった。

かずやはいかかわしい電話に群がる男達の中の一人。

私はその相手をしてる女達の中の一人で

かずやにとつたら、またアホ女がうまいことつれただけの事。
それが現実。

そこに純粋な恋愛感情なんて・・・。

あるような気がして、あるつもりでいた私。

浮かれていた気分の倍、それ以上に

悲壮感にまみれることになった。

次の日の朝から子供二人の体調がにわかにすぐれず、特に上の子は持病の喘息を出して調子が悪そうだった。

子供の体調の変化ははい。

朝のうちはまだ良かったんだけど、昼からは起き上がることも出来ず苦しそうに呼吸を始めた。

夜勤帰りで寝ている旦那を起こしたんだけど一向に起きない。

待つてゐるわけに行かなくて行きつけの総合病院の

救急に電話した。

すぐに来るようお願い、急いで支度をし車を走らせた。

下の子は熱があるのかグズグズとむずがる。

上の子は肩で大きく息をしていて唇がすでに紫がかったような状態だった。

二人を抱えて救急外来に入り、上の子が特に調子の悪いことを伝えると

すぐ診察室へ通された。

『少しの間ね、そうだなあ。一週間程度になると思うけど・・・。
このまま入院ということだね。』

先生に言われ、三人病室に移ることになった。

これからじっくりと時間をかけて上の子に点滴が注入されるらしい。個室だったのは幸いだったけど、三人で入院ってこれは絶対きびしい。

上の子は点滴のお陰で少し楽になってきたのかスヤスヤ眠りはじめて安心した。

下の子はしばらくキョロキョロ落ち着かないようだったけど疲れたのか、私の腕の中で眠り始めた。

そっと上の子の隣に寝かせ、やっと一人の時間だ。

急に疲れが出たような気になりベッドの脇に突っ伏した。

点滴が終わるのは多分夕方だろう。

今になって夕べのかずやとの電話のやり取りが急に頭に思い浮かんだ。

（昨日から今日にかけて散々だよ全く・・・。）
それなのに・・・。

（かずやはどうしてるんだろ・・・）

（もう終わっちまったって思ってたんのかも・・・）

考えれば考えるほど未練タラタラの思いばかりが並ぶ。

だけど・・・結局・・・

《かずやとは、ハナからうまくゆくものではなかった。

お前はただの主婦に・・・育児に・・・専念せよ！！！！》

と神様がお告げを下したんだろうなんて・・・。

自分なりにそんな解釈をしつつ

気分はすこぶる憂鬱のまま、こうして病院での一日目は過ぎていった。

睡魔

2日目からの病室での時間はほんとに長かった。

子供が二人ともに食事を摂らないから下の子も点滴を注入することになった。

小さな手に点滴針が取れないよう、かまぼこ板みたいなもので固定した後

グルグルに包帯が巻かれる。

その手当て時点で泣きわめく。イヤがつて取ろうと泣きわめき暴れるのを

なだめるだけで、もうクタクタだった。

子供も疲れ果ててやっと寝てくれたから私もとウトウトしたところに看護師さんが様子を見に来て目が覚めたり、何一つ落ち着かず休めなかった。

すぐるような気持ちで実家に電話をかけたのだけど

母は仕事が忙しくどうしても来れないと言った。

旦那の母は絶対に無理だろうとわかってはいたけど……。
当然来れるはずは無かった。

こうなれば旦那しかいなかった。

夜勤明けの休みは代わってもらおう。

とにかく少しでもいい……ぐっすり寝たい……。

今の私の願いはそれだけだった。

やっと旦那の夜勤があけて、その日の夕方

旦那と交代することが出来た。

いとしの我が家。入った途端、なんだかよんど空気。

溜まった洗濯物をかき分け、お風呂にお湯を入れる。

その間、空気を入れ替えたり、目に入る散らかり物だけをささっと片付けたりしたんだけど、体がやたら重い。

念願の湯船につかってしばらくすると

まぶたを開けようと必死でするんだけど、すさまじい睡魔が襲ってきて

私はウトウトと・・・。

（気持ちいいこのまま・・・ずっとこのまま・・・）

突然電話が鳴り響き、ハッと我に返る。

（誰！？）

しばらくすれば切れるだろうと思っていたのにずっとずっと鳴り続けている。

しぶしぶ湯船から上がりタオルを巻いて受話器を取った途端

『おめえ！！なんしょんなあ！！ええ加減戻れや！！！！』

『だって・・・。今お風呂入ったばかりで・・・。まだ一時間くらいじゃん！！』

私ほんと疲れた！！お願い！！ちょっとだけ寝てから・・・』

『アホか！！！！すぐ戻れ！！！！子供がぐずって手におえんわ！！！！』

電話はピシヤリと切れた。

泣きたかった。泣きたかったけど・・・泣いてもいられず私はまた病院へと戻った。

旦那は育児には協力的ではなかった。

うつん、ほとんど家庭のことは私がやっていた。

良くある、旦那さんが休みの日に洗車するなんて光景は我が家では一度も無かった。

しないことがわかっていたし、言ってもやるわけないし、

それが私にとつても当たり前になっていた。

病室に帰ると旦那が

『おっせえ！！ほんじゃわし帰るぞ！！！！』

不機嫌そうに言って入れ替わり帰っていった。

子供達は二人共、私の体にしがみついてきて抱っこをねだったが私は倒れこむようにしてそのままベッドに横たわった。

三日目の朝

『おはようございます。』という看護師さんの声で目が覚めた。

全く気づかなかった。

起き上がりたいのに体が動かない。動かそうとしたら痛い！！体中が痛くて痛くて。

やっとの思いで体を起こした。

『今朝体温測れてますかね？』

『すみません。私・・・体中が痛くて。今まで寝てて・・・。』

『ありやりや・・・お母さん風邪がうつっちゃったかな。薬持ってきたでしょうか？』

『はい！！お願いします。』

だんだん寒気がしてきたと思ったらそれからすさまじく熱が出始めた。

子供達は狭いベッドの上を自由にちよろちよと遊びまわっている。そんな子供達が気にはなっていたけど

私の体はもう、思うようには動かなかった。

最後のサンタクロース

次の日はウソのように私も体が楽になった。

子供達もすっかり元気になり、ベッドから下りたり上がったり少しもじっとしていない。

看護師さんが来て

『先生がもう退院ってゆうことで良いとおっしゃってるんだけど・・・明日

小児科でクリスマス会があるからそれには参加して帰りませんか？ですからあさって退院ということでしょうか？』

『とんでもない！！すぐ帰ります！！』

って言いたかった。

だけど、せつかくだし・・・。

なにせ上の子が『クリスマス会』ってのに

すぐさま反応し

『ぼく、行く！！！！』

つと言い出したからには参加せざるを得なかった。

小児科のクリスマス会には20人程度の子供達が集まっていた。

看護師さんと一緒に歌をうたったり、紙芝居を見たり皆夢中で楽しんでる。

うちの子は明日には家へと帰る。

だけどこの子達の中にはいつ家に帰れるのかわからない子もいるんだろうな・・・。

たった一週間程度の入院生活だったけど、きつかった。

つらかった。

子供が健康であるって本当に幸せなことなんだとつくづく実感出来た。

サンタが登場した。

多分小児科の先生だろうな。

うちの子もそれぞれプレゼントをもらって、はしゃぎながら私のところへ戻ってきた。

『よかったね。』ってぎゅっと抱きしめた。

今でもこの病院でのことをよく思い出すんだ。

子供達と見た最後のサンタ。

最後の印象深い思い出から。

あの頃片時も私から離れようとしなかった子供達。

あの子達のやわらかいほっぺ、小さな手に

触れることさえも許されない……………

そんな時がいずれやってこようなんて……………

その時の私はそんなこと……………

これっぽっちでさえ、思ってもいなかったよ……………

本当にね。

疑念

やっぱり我が家が一番いい!!!

こんなにもいとおしく思えるなんて……。

洗濯物……たまりに溜まってる。

階段にも部屋の四隅にも埃がいつぱい。

だけど本日はご機嫌で片付けていきますよっ!!私。

久しぶりに家族揃っての夕食。

何にしようかな……。

バタバタと家事をこなしていたらピンポーン♪

ドアの向こうにはキヨちゃんがいた。

『お帰りい〜!!旦那さんに聞いたら入院しとるっていうじゃろ。

びつくりしたし……。もう大丈夫なん?』

旦那……。なんもいつてなかったのに……。

一応キヨちゃんに一連の入院生活を手短に報告した。

っていうかほとんど愚痴含みの話になっちゃったんだけど。

キヨちゃんは安心した様子で近いうちまた買い物でも行こうって

約束して帰っていった。

久しぶりの家族での夕食が終わると子供達は二人揃って眠たそう

な感じだった。

やっぱりまだ子供達にも病院生活の疲れが残っているみたいだ。

急いでお風呂に入れる。

下の子は体を洗ってる最中に居眠りを始めた。

お風呂から出して布団に寝かせた途端、子供達はもう爆睡だった。

という私も添い寝してそのまま、いつの間にか眠ってしまった。

トウルルウ♪トウルルウ♪トウルルウ♪トウルルウ♪……

な……。なに?……

何かの音で目が覚めた……。。

トウルルウ♪トウルルウ……。。

旦那の携帯だ。

起き上がって見たらまだフスマからは明かりがこぼれてる。

まだ旦那は向こうの部屋で起きてるらしかった。

何時！？時計を見たら１１時まわってた。

いつの間にか切れたのにまた鳴り始めた。

（会社？）

しぶしぶ起きてフスマを開けたら旦那はいつものごとく、でかいヘッ
ツドフォンで

洋楽をガンガン鑑賞中だった。

陶醉しきっている旦那の肩を寝ぼけ眼でたたくと

サツとヘッドフォンをはずして

『なんなあ？？』と旦那が聞いた。

『電話・・・あんたの・・・。鳴って目が覚めた。』

旦那がオーディオのスイッチを切った。

そしたら電話の音がまだしてる。

『出たら』

『・・・』

旦那が携帯を取りに言って戻ったら音はまた切れた。
のに・・・またすぐ鳴った。

私はチラリと旦那の方を見た。

多少ながら明らかにうるたえている。

だけど旦那も私をチラリと見やると

ぱつと背を向け思い切ったように電話に出た。

『もしもし・・・』

おっ、おうっ・・・。

まっ・・・まあな。

んゝえつとお。

・・・あのおあれじゃー！！

おめえ・・・もっ、かけてくんない！それじゃな。』

『・・・』

その後はなんともいえない空気が流れていた。

私はローテーブルに肩肘をついて天井を見上げていた。

『飲み屋の女じゃ！！今からいけるかつーの！！』

あまりのわかりやすさに呆れた。

長い沈黙の後、いてもたってもいられなくなった旦那は

こそこそとトイレにゆき、こそこそと寝室に入っていた。

一ヶ月に一度くらい会社の人との飲みに出かけていた。

必ずシャワーを浴びて身支度を整えて出かける。

帰ってくるとなんか落ち着かない様子のことが多く

ことのほか帰宅時間が遅くなった時などは

やたらと私にいちやつくように絡んできたり齒の浮くようなことを
言ってみたり、拳句は財布に携帯してる子供の写真をわざわざ取り
出して

語りかけたりしてた時はさすがに鳥肌立つ気がした。

そんな旦那にずっと疑念を抱きつつ

確実に女と寝たな・・・と私はその都度確信していた。

結婚当初はむかつて腹立たしくて修羅になったことも何回かは

あったのだけど・・・。

一人残った私の頭の中・・・

・・・思い浮かべていたのは再び・・・

かずやだったんだ。

電話番号

旦那とはそれ以降、口もきかない関係でいたかった。
いたかったけども……。

子供って何か感じ取るのだろうか、やたらと私と旦那の間を行き来し私には『お父さんがね……』で始まる話題を提供し、旦那には『お母さんがね、……』で始まる話題を提供しつつ、せっせせっせと仲直りの

仲介をしているようにみえた。

それにいくら意地を張ってもまだ手のかかる小さい子供を抱えている私だ。

どうしても手が離せない時、ちょっとでも子供を見てくれる、そんなささやかな援助を拒んでまで旦那を拒絶する自信は無かった。だから生活自体は会話が必要最低限の範囲になった以外、別に変化はなかったんだ。

しばらくはそんな感じだったけど結局小さな仲介屋の活躍でその後は知らず知らずすっかり元に戻ってっただけだね。

そして、その頃には私……かずやともまた復活してた。

旦那との事件後また元気に上の子は保育園に通い始めた。

カトリック系の私立保育園のクリスマス会はなかなか盛大だ。

ずっと休んでいたから登園拒否するんじゃないかと不安だったんだけど

クリスマス会のお陰も有り全く大丈夫だった。

保育園に送り出したその日、私は久しぶりにテレホンレディの仕事を再開した。

といっても伝言を整理しようと思って。

もうかなり日数がたっているから古いのは削除してまた次の伝言を受ける準備をしなきゃ。

山のような返信が入っていた。

数件覗きすべて・・・かずやだった。

『あや・・・ごめんよ・・・なんでオレ、んなこというてもおたんか・・・』

『もおほんとに終わりなん？・・・』

『ずっと待つとるわ・・・とにかく許してくれるまで待つとく。』

最後まで聞いてない。途中で電話を切つてすぐかずやの携帯にかけたからね。

留守電へと繋がった。

『かずや・・・あやです・・・』

涙がうわつとあふれてきて、ぼろぼろと落ちた。

『あれからいろいろあつて・・・ごめんね。』

そこまでしかメッセージ残せなかった。

再度かけ直す。

『22-0030ウチの電話暗号。夕方四時までにかけれたらかけてください。』

待つてる。』

かずやに初めて家の番号を教えた。

まだ私は携帯を持っていなかった。

その当時はまだそれが普通な感じで。

ちよつと誰しもが携帯を持つようになる、ちよつと手前あたりだったんじゃないかと思う。

団地の同じ保育園のママの中にもまだ私用で持つてゐる人はいなかったから。

今までかずやには私のほうから連絡をしていた。
(そろそろ教えてもいいかなあ)

なんて思つてた矢先に、あのようなことに。

一時間位してかずやが電話をくれた。

『もしもし!!あや?久しぶり!!元氣かあ?』

電話の声は明るかった。そして優しかった。

『うん、元気・・・かずや、ごめん・・・私・・・』
やっぱり涙が出てきた。

だけど嬉しくて・・・。ほんとに嬉しくて。

この日から、私のかずやへの気持ちは急速に加速していった気がする。
何の戸惑いもなく。

境界線

年末はあつという間に訪れた。

三交代の旦那にとつては大晦日もお正月も関係なく

会社のシフトに動かされる毎日になんのかわりもなかった。

今年の年末も私と子供達だけで旦那と私の実家で交互に過ごす予定だった。

かずやに年末の予定を尋ねたら、どこもいかないと言った。

『徳島には帰らないの?』

つて聞いたら

『帰らんよ。もうここ何年も帰ってないし。別に用もないよ。』
つて言った。

『・・・なあ、あや・・・無理はわかつとんけどな・・・なんとか会えん?』

『・・・。』

『あや、ええよ。無理ゆーてごめんよ。』

『かずや、会えるよ。これから・・・少しの時間だけど。それでもかずやが

良ければ・・・』

それはだめどころか、絶対してはならないことだった。

自分でもわかつてた。

ただどかずやに会いたい。どうしても。

時計は11時45分をさしていた。

旦那はもう20分程前に仕事に出かけて居ない。

今日からは夜勤だ。

『オレ、今からすぐ行くよ。この時間なら20分くらいで行けると
思う!!』

あ、やべっ!!車取りに行つてやから・・・30分か!!』
メチャ弾んだ声でかずやは言った。

『じゃ、0時20分位に、団地横に出てくから。気をつけてきてね。』

『うん、じゃ後で。あゝオレ！！めっちゃ嬉しんだけど……。』
『私も同じく！！』

電話を切った後は、ドキドキしてきて。

神経質すぎるほどに音を立てないよう支度をした。

30分はあつという間にたち、待ち合わせ時間になった。
子供達の様子を確認する。

二人ともスヤスヤと寝てる。

階段を静かに降り靴を履き、玄関のドアをそつと開けた。

まわりはシーンと静まりかえってる。

まだところどころ灯りがついてるけど団地内を歩く人影は見えない。
玄関を出てドアを閉める。

もう一度ドアを開けて耳を澄ます……。大丈夫！！

鍵をかけ、石の階段を駆け下りた。

そのまま団地横の歩道に出たら、ちよつと先にかずやの車が見えた。
駆け寄って助手席から乗り込んだ。

かずやは車をスーッと出しながら

『どうすればいい？』

『公園のほうに！！』

ドキドキで、心臓バクバク。

図書館裏の車の停めれるスペースには幸い誰も停めてなくて
私達だけ。

車を停めた途端、

私とかずやは抱きしめ合つてキスした。

このにおい……。メチャ好き。

香水のにおいとかじゃない、かずやから何となく出てる……。甘い
におい。

私の体の力はスルスルとほどけるように抜けていく。

かずや……。溶けそうってこういうことなんだね……。

触れられるところ全てがほんとに気持ちよくて……。

そして……かずやが私の中に……。

かずやと私はしばらくその後も抱きしめ合っていっぱいキスもした。すぐく幸せな余韻。

だけど……（帰らなきゃ！！）

時間は？！……急に胃が痛くなるような気分がした。

『かずや、今何時？！』

かずやもハッとしたように体を起こした。

『わっ、もお2時前やん！！送ってくわ！！』

急いで団地に戻る。

『とりあえず大丈夫やったら電話して。待ってるな！！』

かずやの車を降りて、急いで帰る。

階段を駆け上がりドアを開けた。

シーンと静まり返っている。

少しほっとした。

階段を上がると部屋のフスマもしまった状態、何も変わらない。

子供達はスヤスヤと寝てくれていた。

心臓のバクバクはまだおさまってない。

すぐにかずやに電話した。

『そっか！！良かったあ！！じゃ……オレ帰るな。ほんまにあり

がとう、あや。

おやすみじゃ。』

『私もありがと。明日仕事大丈夫！？』

『イケるよ！！』

『気をつけて帰って！！おやすみ、かずや。』

電話を切っても、なかなか眠れなかった。

かずやとのこと何も後悔はしてなかった。

それがどういうことになり……どういう形で自分に返ってくるのか。

私は何の覚悟もしないまま、妻としても母親としても

超えてはいけない境界線をあっさり踏み越えてしまった。

それは突然に

年が明けた。

かずやと私のいわゆる不倫生活は、ある意味順風満帆に思えた。私の家庭生活にはなんら変わりは無くて、不倫してることをそれほど大それた事にも思わなくなった。

かずやとの電話をあれほどピリピリ警戒していたのに・・・。

今に始まったことではないけど旦那の洋楽鑑賞は長い！！ヘッドフォンつけたら

二時間くらいはもう全く、あちらの世界に陶醉だ。

その間少しくらいならかずやと連絡取ったってかまわないはず。

そう思った私は、旦那があちらの世界に行ったことを確認するとこっそりかずやに電話していた。

そして今日も・・・。

リビングとキッチンが簡単な間仕切りをしていて、私は食器を洗うふりをしながらかずやと電話していた。

旦那は少し前からトリップ中。

ヘッドフォンからシャカシャカと音が漏れ出しているのがわかる。

かずやと話に盛り上がり、そろそろ切らなきやと思った矢先

背中あたりに気配を感じた。

すごく嫌な予感がする・・・。

チラッと振り返った時そこには旦那がいた。

私は黙って電話を切った。

『な、なに！？どしたん！！！！！！』

そのまま流しの食器に思わず手を伸ばす私に

『おめえにまさか男がおったとはな・・・。』

吐き捨てるように旦那が言った。

『は、はあ！？何のこと！？』

『全部聞いとった！！！！すつとぼけんな！！！！』

『訳わからんわ!!』

『もうええ!!今すぐ出てけ!!』

そこから旦那とどんな押し問答したのか良く覚えてない……。
だけど気がついたら階段のところで旦那と格闘になってた。

私は突き落とされそうになりながら必死で子供の落下防止の柵にしがみついていたんだ。

そして騒ぎに気がついて起きてきた上の子が

泣きながら

『ダメえ!!お母さんが落ちちゃうよお!!』

って旦那の足にしがみついていた。

旦那の顔はすさまじい形相だった。

目ひん剥いて充血してて歯むき出しで……。

『とにかく今から出て行け!!すぐに!!……じゃなけりや

突き落とすだけじゃ!!』

『おかあさあん!!出て行っちゃダメえ!!!!出てかないでえ!

!!』

何十分そんなことしてたのかも忘れたけど

もうこの旦那の怒りをどうにも出来ないと悟った。

『わかったからあ!!。出てくから離して……。』

『おう!!出てけ!!すぐになあ!!』

私の胸ぐらをつかんでいた旦那の手が乱暴に私を払いのけた。

ボー然と立ち上がると服が……。異様にねじれてた。じゃない・

・破れてた。

ふらふらと財布を取りに行く。

旦那は上の子を抱き上げ

『子供はこれから連れてく!!おめえのこと洗いざらい親に話す!!
もう終わりじゃ!!じゃあな!!』

階段をフラフラと下りる私に容赦なく浴びせられる旦那の罵倒。

『おかあさあん!!おかあさあん!!』泣きわめく子供の声。

ドアを開けると同時上から旦那が怒涛のごとく駆け下りてきた。

『あ、あの・・・私・・・』

そう言いかけ戸惑う私を旦那は容赦なくドーンと押すとドアはバタンと閉まり

乱暴にガチガチと施錠された。

ぽゝ然と立ちすくむ私・・・。

『あやちゃん！！・・・あやちゃん・・・』

キヨちゃんの小さく呼ぶ声が聞こえた。

だけどそのまま私は足早に石の階段を駆け下り団地の外へと飛び出した。

迷い道への扉

フラフラと団地横を歩いた。

道路脇に設置された時計は0時45分を指していた。

頭の中は真っ白なまま、シーンと静まり返った住宅通りを歩く。

そこを抜けると慈恵病院の玄関。

暗い建物をバックに電話BOXだけが煌々と光っている。

吸い寄せられるように中に入り、おもむろに小銭を探した。

かずやに電話する私の手は震えていた。

『もしもし・・・』

『あや！！大丈夫か？！急に電話切ったからヤバイんだろうって・・・』

『』

『今、外・・・私追い出されちゃって。』

『え？！ほんまに？！・・・今どこ？！』

『慈恵病院の電話BOX・・・』

『そこにおって！！すぐ迎えに行く！！わかった？！あや！！！！』

『・・・わかった・・・』

20分以上そのままそこにうずくまっていた。

1、2台、車が通ったような気がする。

ガシャッってドアが開いて

『あや！！！！！！』

抱きしめられた途端、涙がウワァ〜って出てきた。

『行こう・・・あや。』

かずやに抱え込まれるようなかんじで

車に乗った。

走り出した車の中、私達に会話は無かった。

私はただボー然と外を見ていた。

たくさんのネオンが、ぼやぼやあと揺らめきながら

次から次へと変わっていく。

涙が線になり静かに流れ続けた。

車は脇がコンクリート塀になつて細い路地に入った。

『あや・・・着いたよ。ここから俺のとこ歩いてかなアカンけどいけるか?』

『・・・うん。大丈夫・・・。』

車からへなへなと降りる私を申し訳なさそうに見ながら

『ごめん。あや。俺チャリ持って帰らな。まじ歩けそうか?』

『大丈夫だよ。』

かずやは自転車を押して私の横に並んで歩き出した。

歩き出してしばらくすると私の体はガクガク震えだした。

抑えるように思わず腕組みして歩く私を、かずやは心配そうに見た。確かに外は寒い。だけどこの震えはただそれだけのことではない気がした。

かずやがそんな空気を打ち破ろうとするかのように

『コイツ二代目!!一代目は盗まれてさ(笑)やっど・・・やあつと!!買ったばっか。』

『そうなんだ。』

ほんの少しだけ笑って返すことが出来た。

『ここ!!着いたよ!!』

急に言われてびっくりして立ち止まった。

顔を上げるとそこは住宅地に並ぶ普通の民家だった。

『ここ!?!この・・・家!?!』

『そうそつ。もう大家さん確実に寝とうけん。おいで!!』

音を立てないよう、かずやはそつと鉄製の門扉を開くと自転車を抱えて

入った。

『あや・・・そこ閉めといて!!』

かなり戸惑ったけど、私は慌てて入ると門扉を閉めた。

かずやが戻ってきて私の手を引つ張った。

そこは小さい庭だった。

玄関から入ると思ったら、かずやはそのまま通り過ぎ

まだ奥へと歩いていく。

そして立ち止まるとポケットから鍵を取り出して静かに扉を開けた。

一つ目の箱

すぐ部屋なのかと思ったら、そこは暗い階段だった。

かずやがパチンと電気のスイッチを押した。

『このままで上がってかんまんけん。』

かずやは私の手を引いて階段をのぼった。

『私・・・てつきりコーポみたいなとこに住んでると思ってた・・・』

『なかなか面白いづくりだろ。』

階段を上がると細く長い廊下になってた。

そして三つほどの扉が等間隔に並んでいた。

一番手前の扉に手をかけると、かずやは

急に思い出したみたいに

『おっ・・・あや、トイレはこの突き当たりのとこだから。』

って奥のほうを指差した。

『ここで靴は脱ぐ!! あ、ちよい待って!!』

そついうと部屋に入り電気をつけた。

六畳ほどの畳敷きの部屋の真ん中に陣取っていたのは

小さな正方形のコタツ。

コタツ布団ではなく、薄いコタツ掛けのようなもので覆われている。

そのコタツの天板には山ほど空のペットボトルが乗っかっている。

ボー然と立ちすくむ私を尻目に、かずやは小さな石油ストーブを

つけていた。

『すぐあつたまると思っわ。・・・どした!?!』

『うっん・・・別に・・・』

とりあえず靴を脱いで上がる。

コタツの向こうには青いナイロンのような大きな布みたいなのが
無造作に畳の上にベローンとおいてある。

コタツの横に座り込んで、しばらく眺めていたが

結局あと小さなテレビくらいしか発見出来ないほど
何も無い部屋だった。

かずやは青いナイロンのようなものをコタツに沿うように敷きなおし
自分が座ると私に

『おいでっ』

と言った。

かずやの隣に座ると、かずやは私をぎゅっと抱きしめて、キスした。
その力はとても強くて私はそのまま押し倒されたのだけど
その途端

『ねえ！！かずや！！』

下からかずやをグッと引き離すようにして

『この下の敷物みたいな何！？』

って聞いてみた。

『これ寝袋だよ。』

『寝袋！？・・・』

『そっ！！俺、毎日これで寝てる。』

『布、布団は！？』

『なっしい！！（笑）』

『う、うそでしょ！！信じらんない・・・私、寝袋なんて初めて見
た・・・』

すごくうろたえた。ほんとに私・・・。

まだ矢継ぎ早に聞こうとする私の口をかずやはキスでふさいだ。

そしてかずやはすごく息が荒くなってきた・・・そしてそのまま強
く強く私を抱いた。

気がついたら、カーテンのかかっていない、すりガラスの窓の外は
少し明るくなりかけていた。

『朝になっちゃったね・・・かずや？』

『だね・・・。』

『仕事大丈夫？』

『イケルよ・・・』

今すぐにも寝そうな感じの返事。

『・・・・・・・・』

『わたし・・・どうなっちゃうんだろ・・・』

『・・・・・・・・』

『なるようにしか・・・ならんのんちゃうか・・・』

なんだか・・・にぎやか・・・話声みたいな・・・うう・・・

目を開けると・・・見慣れない絵・・・いや襖。

その途端ばあつと飛び起きた。

隣に誰もいない。そ！・・・部屋には私一人だった。

起き上がるとコタツの天板の上に書置きがある。

（仕事行ってきます！！帰れたら昼に帰る。待っててな。）

ほとんど殴り書きのような勢いの文字だった。

時計を探す。だけど無いからとりあえずトイレへ。

トイレを出ると横には小さな炊事用の流しみたいなものが

据え付けてあり、足元には無造作に一口コンロが置かれていた。

部屋に戻るとテレビをつけた。

チャンネルを変えても変えても映るのは三つくらい。

結局、時間はもう11時をまわっていた。

目が覚めてくると、昨日の出来事が鮮明に蘇ってくる。

だけど・・・ウソだよな！？そうだよな！？・・・

現実逃避な思いがグルグルと頭の中を駆け巡る。

でも今、私、間違いなくかずやのどこにいる・・・。

何、やってんだ！！いったい・・・。

・・・そしてまた、ボー然とたたずんでいた。

ボー然の目の先には・・・和歌山みかんジュース・・・和歌山みかんジュース・・・

コタツの天板の上の空のペットボトルはすべて和歌山みかんジュースだった。

うゝもお・・・なんだかうつとおしい！！よっし！！

私はペットボトルの撤去に着手することにした。

かずやが帰ってこない、ごみ袋もわからず、とりあえず廊下に並べておくことにした。

終わりがけたころ、階段を誰かが駆けあがって来た。

ドアが開くと同時

『あや！！ただいまあー！！』

せききつた様子でかずやは喋りだした。

『あや、大家さんに今、彼女が事情があって来てるって話した。当分いるかもしれないからって・・・』

そしたら、いいよってゆってくれたんよ。

だから、一応あやからも、大家さんに

挨拶だけはしといて！！

わかった！？』

『・・・うん。わかった。』

『それじゃ、オレまた行くわ。』

『え！？もう！？』

『帰るのはなるべく早く帰るけん！！』

抱きしめてキスしたら、速攻かずやは駆け降りていってしまった。

またまた、ボー然な時が訪れた。

けど、そうだ！！

大家さんにご挨拶しなきゃ。

・・・てか・・・私すっぴんじゃん！！

歯磨きさえもしてない！！

できない！！

おまけに服やぶれてる！！

慌てて財布を見た。

二万ちよつと。

ほんのちよつとだけ安心した。

コタツの向こうにブラシとドライヤーとスタンドミラーが散乱してるのを見つけた。

ひどい！！何なの、この顔！！

朝寝坊の甲斐なく、夕べの出来事による疲れは恐ろしいほど顔に出ていた。

どしたらいい！？

ほんとにどしたらいいんだろう！？・・・

しばらく考えて、キヨちゃんに連絡を取ることにした。

とにかく上着だけは着替えなきゃ・・・。

かずやの服はどこにあるんだろう？！

部屋の中にはまったく見当たらず、もしかしたらと思い、襖を開けたら

そこは4畳半くらいの畳の部屋だった。

衣装ケースが二個。

ふたはそれぞれ散らばり

中にははみ出しながらも詰め込まれた服。

漫画、雑誌、よくわかんない箱、書類みたいなもの。

ありとあらゆるものが散乱していた。

衣装ケースを物色し、無難に黒いフードつきのトレーナーに着替えた。

かずやの二オイがプンプンする。

窓を開けると隣近所の屋根の向こうから岡山駅前の派手な化粧メー

カーの

電光看板が見えた。

そっかあ、ここは西口に面してんだ。

そして岡山駅西口はすぐそこだ。

お天気とてもいい！！

外の空気を吸うと、少しだけ元気になれたような気がした。

とりあえず電話をかけるため、出かけることにした。

できることなら・・・どうか今は・・・大家さんに会いませんように

願いつつ、階段をおり、

扉を開け、外に出た。

玄関まで歩くと玄関は閉まっ
ていて、家の窓もきちんと閉められて
いる。

人のいる気配は無かった。

門扉を出て、私は駅のほうへと足早に歩き出した。

忘れられない言葉

びつくりするほど人通りの少ない路地だった。

歩いてたのは私一人で、誰とすれ違うことも無かった。

数分歩くと突き当たりで、その建物はパチンコ屋だった。

その横をすり抜けるとそこはもう、西口前の通りだった。

たくさんの行き交う人、行き交う車、あらゆるところから聞こえてくる音。

静かなところから、いきなりその中にほうり込まれた私。

漂ってくるカレーの匂いに包まれて、思わず立ちくらみしそうになる。

とにかく電話……。

カレー屋の隣のコンビニの前に電話はあった。

『はい、清野です。』

『キヨちゃん、私。』

つて言った途端、

『あやちゃん！！！今どこよ！！？ほんとに心配で……いつたい何が起こったわけなん？』

そこからはガンガン！！ガンガン！！

キヨちゃんから質問、口撃されたわけなんけど

私もどこをどう説明していいやら頭はもろろん、気力も……追いつけずで……

キヨちゃんもそんな私から一向に満足な返答が帰ってこないことがもどかしくてたまらないようだった。

あれからスグに旦那と子供も出かけて、今朝、旦那だけ県住に戻ってきたと

キヨちゃんは教えてくれた。

『で、あやちゃんは今日もその知り合いのところにおるつもりなわけ？』

『・・・。う・・・ん。』

『今日さ、旦那さんは、なに勤務？』

『夕勤。たぶん4時半くらいに出てくと思う。』

『事情はどうであれ、旦那さん今朝帰って来たってことは仕事は行くね。多分。』

『だろうね。』

『ね、あやちゃん！とにかく戻ってきたよ！！っていうか、うちにおいでや。』

とにかく私も話したいしさあ・・・。あゝ私が車運転できたらスグ迎えに行くのになあ。』

あやちゃん！！お金とかは大丈夫なん？！』

『一応サイフだけは持ってきたんだ。多少あるかな・・・。』

『じゃ！！とにかく今から戻ってきたよ。ね？』

こつちにいても何もできるわけじゃなかったし、かずやも夜まで帰らないし。

私はそのままバス乗り場に向かった。

県住入り口のバス停に着き、その前の店の公衆電話からキヨちゃんに電話した。

鍵は開けてるから、入ってくるよう言われて歩き出したものの、なんだか胃がキリキリ痛み、嫌な緊張感に襲われた。

ベランダに洗濯物が干され、開け放たれた窓から掃除機の音が聞こえたり周りは

いつもと何も変わらない日常だった。

でも見上げた私の家は窓もカーテンも閉ざされたままだった。

近くに人がいないとわかると小走りでキヨちゃん家に。
玄関をボタンと閉めたら、キヨちゃんが

『お帰りい。』

つて迎えてくれた。

『・・・。ただいま。ごめんね・・・。』

『どーぞ。今コーヒー入れるな。』

フラフラと上がり込みテーブルにつくと、私はそのまま突っ伏してしまった。

『大丈夫？なんか今日ちゃんと食べた？』

テーブルにマグカップがコトンと置かれた。

私はスクツと体を持ち上げて

『ありがと……。』

って言うときヨちゃんが向かいに座ったと同時に

『彼氏がいるんだ……。』

って切り出した。

キヨちゃんは一瞬時間が止まったみたいな顔をした。

『……。そ、そうだったん。それじゃあ昨日は彼氏のところに？』

いたって平静にしようと、キヨちゃんは思ったのかもしれない。

『そう。』

『何歳なん？彼氏。』

『24。』

その途端キヨちゃんは平静を失ったらしい。

『2、24！？何で！？……。』

いったいどこで知りあつたんよ！！！！』

『……。』

少しの沈黙の後、

キヨちゃんが突然何か思い出したみたいに

『ね、あやちゃん……。まさか！？』

『違うんよ！！そんなんじゃなくって！！』

とつさに否定してしまった。

なんだか気まずい空気が流れてキヨちゃんも黙り込んでしまった。

私から

『昨日はほとんど筒抜けだったでしょ？』

って聞いたら

『うん。さすがにね……。すごいケンカしてるなって……。』

そしたら子供の泣き声が聞こえてきて……。

私ね、ほんとお節介だと思ったんだけど・・・その泣き声聞いてたら正直・・・頭にきてさ！！

あんたたち何やってんの！？子供の前で！！って。

いてもたってもいられなくなってるね、言いに行こうと起き上がった私を旦那が必死に止めててね・・・。

そうしたら、あやちゃんが外に出てきたから・・・。

私は聞きながら涙がボロボロこぼれた。

その後キヨちゃんに昨日のことをありのまま話した。

『だけど・・・このままスグ離婚てのは有り得んと思うよ。』

子供だっておるわけやしさあ・・・。

だいいち、あやちゃんだって、彼氏のところに

このまま転がり込んで住めるわけじゃねえじやろ？』

『うん。それはね・・・。』

かずやの住んでる場所のことや部屋の話はしないでおこうと思った。

キヨちゃんがなんていうかなんてリアルに想像できた。

『やめときなよ！！絶対無理だから！！』

たぶんね。ううん、確実。

ドタン！！上のほうから音が聞こえた。

キヨちゃんと顔を見合わせ、ほとんど同じタイミングで時計を見た。

4時20分。旦那だ！！

『やっぱ仕事行くね。』

『子供はどこに？』

『旦那の実家だと思うんだ。お母さん仕事休んでるのかもしれない。』

・・・。

『子供のことにしても、一時的にあやちゃんと引き離せてもずっとなんて』

絶対無理だと思う。旦那さんのお母さんも働いとるわけじやろ？

子供にはあやちゃんがまだ絶対必要！！』

『・・・でもさ。旦那にとってはそうじゃないかもしれないよ。』

『旦那さんはともかくさ・・・。』

『お母さんが突然おらんようになるなんて・・・子供たちはこれっぽっちも・・・
想像さえ・・・してないと思うよ・・・』

キヨちゃんが言ったその言葉が忘れられない。

放言

時間はあつという間に過ぎる。

キヨちゃんの旦那さんがそろそろ帰ってくる頃だ。
そしてかずやも。

『キヨちゃん、電話借りていい?』

かずやの携帯にかけたら速攻繋がる。

『あや!!今どこ!?!』

『あのね、かずや。今、県住に帰ってきてんの。なんだけど・・・』

『なんで!?!なんでな!!あや!!待つといてっていつたる!!!』

私の言葉をさえぎってスゴイ剣幕でかずやは言った。

『ごめん。でもね、今私の家じゃないんよ。同じ県住の友達のとこ。』

『・・・。。』

『かずや?』

『そつか。じゃ、今からすぐ迎えに行く。』

不機嫌な声でかずやは言った。

『い、今からすぐだね!?!』

キヨちゃんがなんか言いたげに私を見てる。

『ちよ、ちよっと待つて!!!』

受話器を放すと、キヨちゃんが小声で

『会わせて!!!玄関まで来させて!!!』

『え!?!いいの・・・』

ウンウンとうなずくキヨちゃんに言われるまま
かずやに号棟とキヨちゃんの部屋番を教えると

『わかった。』

そのままぶつきらばうに電話を切った。

『なんか機嫌悪いみたいなんだ。彼氏。』

だけどそんなことまったく構わない様子で

キヨちゃんは例のいたずらっぽい目つきをして笑った。
20分位してピンポーンが鳴ると

キヨちゃんが、私に

『彼氏に入ってもらって。』と言った。

『えく???旦那さんも帰るし、まずいよ。』って
焦って言ったんだけど、キヨちゃんに

『早く!!はあくやあく!!』

って押されてドアを開けた。

かずやは私の顔を見るなり

『あや、帰ろ!!』

『ちよつ、ちよつと入ってって!!友達が・・・』

『・・・俺に?』

『う、うん。』

一瞬かずやは戸惑ったみたいだけど、私が手を引くと
仕方ない素振りに入り、キヨちゃんに挨拶をした。

キヨちゃんは目をクリクリさせて、かずやを見た。

『どうぞ!!何か飲みます!?!』

って言うキヨちゃんに、かずやは

『もう帰っていいですか?俺、あやと二人つきりでいたいので。
』
と言いつつ放った。

キヨちゃんも私も啞然となり一瞬固まってしまった。

『ご、ごめん。そりゃ悪かったね・・・。』

キヨちゃんの笑顔は明らかに引きつっていた。

かずやが玄関に向かった時、私はサイフを小脇に抱え

キヨちゃんに、ゴメンって手を合わせた。

キヨちゃんは呆れ顔で

『なんなん!!あの人!!』

って口をパクパクさせながら、それでも笑顔で返してくれた。

玄関で、キヨちゃんは私に

『いつでも連絡して!!待ってるからね。』

って言った。

だけど、私がキヨちゃん家にお邪魔したのは、これが最後。もう二度とお邪魔することはなかったんだ。

かずやは車にもう乗り込んでいた。

私が乗ったら、すぐに車を走らせた。

そして

『あや！！なんか食べにいこうぜ！！』

つと、さつきまでの不機嫌さは全く・・・。

上機嫌で話しかけてきたんだ。

ホームシック

私はとりあえず買い物したいとかずやに言った。

歯ブラシや化粧品、下着・・・と思いつくまま買い揃えていく。

かずやは興味深そうに私の隣にピッタリ寄り添ってメチャ嬉しそうに着いてくる。

最初は私もそんなかずやと、あれやこれや楽しくはしゃいでたもののそのうち、いろんなものを買えば買っただけドンドン気持ちは不安になっただけだった。

（あれも無い！！これも無い！！無い！！無い！！無い！！）

そのうえ、かずやが

『あや！！帰ったら風呂いこうな。』

と言った。

『お風呂！？』

『うん！！近くの銭湯。ちょっと歩くけどな。』

『せ！？銭湯！？・・・』

浴室・・・なかったっけ・・・今あらためて気づいた・・・。

なので・・・銭湯グッズも買った。

最後に大家さんにご挨拶用で、お菓子も。

どれもこれも安物ばかりで特に化粧品なんてチープすぎてちゃんと使えるのかも不安だった。

でも無いよりまし。

悲しいことに、安くても数買えば結構な額で・・・。

私のお財布はドンドンさびしくなっていた。

ファミレスで食事して、そのトイレでメイクしたり簡単に身支度した。

その後二人揃って初めて大家さんに挨拶をした。

大家さんは、ぽっちゃりした元気のいいおばちゃんて感じの人で、私を見るなり

『へえ〜！まさかお兄ちゃんにこんな彼女がいたとはねえ〜。』
って笑った。

『昼間は私もいろいろ用があって出ることが多いし、一向に姿も見かけんから
ほんとに彼女が来とるんじゃないやろうかって思うとったんよ。』

『すみません。突然こんなことになって……。よろしく願います。』

大家さんに無事挨拶できてホッとした。

そしてかずやと初めての銭湯に行っただけ、いがいと遠くへなり歩かされた。

タイムスリップしたみたいなマジ古い銭湯。

それだけでもかなり引いてしまい、立ちどまった私に

『先出たら待つとくから、ゆっくり入ってえ〜よ。じゃな。』

かずやはサッサッが入ってた。

番台つてとこに、おじちゃんが座ってた時点でドン引き状態の私。

誰か入ってる様子だったけど脱衣所には私だけで……。

でも入らないわけにも行かなくて、泣きたい気分で脱いで

引き戸を開けた途端ガヤガヤにぎやかな話し声が飛び込んできた。

入ったら、突然話し声がピタリ！！と止んで一斉におばちゃん達が私を見てた。

慌ててそそくさと座ってシャワーを出すと、おばちゃん達も会話再開。

終始……。逃げ出したい気分だった。

外に出たら、首にタオルをかけて、かずやが待っていてくれた。歩き出して

（これって南こうせつの歌と一緒に状況……）

頭にメロディーが流れ出したと同時に、私の気分はすごく沈んだ。

部屋について、またしばらくボー然とする私。

握り締めたタオルが冷たい。

私ははっとして

『かずや！洗濯はどうしてんの！？』

『洗濯機あるよ。下りて横にあつたる？あれ、俺のだから。』

私は心底ほっとした。

明日は洗濯しよう！！

かずやが私を抱き寄せた。

明日かずやはまた出かけていくけど私はいつたいていどうすればいいんだろう。

かずやに抱かれてる私の頭の中は不安でいっぱいだった。

子供たちの顔が浮かんだ。自然と涙がこぼれた。

かずやはそんな私に気づいて、一瞬止まり、私を見つめた。

けど・・・ただ抱きしめるだけで何も言わなかった。

かずやの腕の中で全く眠れないでいた私は完全にホームシックにかかっていたんだ。

プロローグ

次の朝、目が覚めると、もうかずやはいなかった。

今日は書置き・・・無いみたい。

とりあえず今日の私のすべきことは洗濯。

すべきことがあるって嬉しい。

着替えて洗濯しに降りたら大家さんが庭に出ていたから
挨拶をした。

洗濯できるまで、掃除でもしようかな。

隣の部屋に小さなホウキを発見していた私は、窓を開け放して早速
とりかかった。

皮肉だけど、こんだけ物がないと掃除がすごく楽だ。

『沢本さん！！沢本さあゝん！！』

声が聞こえる。

『えっ！？あ・・・はあゝい！！』

慌てて出てみると階下に大家さんがいた。

『ごめんねえ。ちよつとええかな・・・』

『あ、はい！！』

階段を降りた私に

『沢本さんっていうてもアンタまだ結婚もしてないのにね（笑）。』

『いいえ。別にかまいませんから。』

『あ、あのねゝ。アンタ当分は・・・お兄ちゃんと同じにおるわけ
よね？』

突然聞かれてびっくりした。

『えっ！？・・・』

戸惑う私に大家さんが慌てて

『いやね、それがいけないってことじゃないんよ！！もしそうなる
んだったら』

アンタにこの際お願いしとかんといけんと思うてね・・・。

『あ、はい。』

大家さんは今まで何人が大学生をここに住まわせてきたらしい。水道代はそれぞれ各自で大家さんに支払うことになっていて今まで滞納する子は誰もいなかった。

かずやも最初のうちはきちんと払っていたらしいのだけどここ最近は全く払わず、大家さんも何回かは、かずやに催促してみたけど、全然で。

結局滞納分は大家さんが払ってるということだった。

『昨日アンタを見るまでは、内心どんな子なんか・・・気になってねえ。』

でもアンタを見てしつかりしてる感じの子だから安心したんよ。でね、私も迷ったんじゃないけど・・・この際アンタに頼もうと思ってね。

ほんと突然ごめんねえ。』

大家さんは申し訳なさそうに私に一枚だけ紙を渡した。

『あの・・・。今までの滞納分はおいくらですか？』

『滞納分はもういいよ！！それはもういいから！！』

『で、ですけど。それは・・・。』

『今月からはきちんとしてくれたらいいから。ね！？』

『あの、じゃ！！ちよつと待ってください！！』

私は階段を駆け上がるとすぐまたサイフを持って駆け降りた。

そして三千円ちよつとを大家さんに支払った。

大家さんは安心したようで、また

『ほんとごめんねえ。』

と言った。

その後、少しためらったように見えたけど

大家さんが思い切ったように私の目を見てこういったんだ。

『お兄ちゃん悪い子じゃないよ。優しいしね・・・。』

付き合うのはかまわんと思う！！じゃけどな・・・一緒になるのは絶対考えたほうがええ！！

あの子は金にルーズすぎる。』

『・・・あ、はい。』

『それじゃあね・・・。これからもよろしくね。』

私はペコリと大家さんに頭を下げた。

階段を上がる私の足は重かった。

大家さんの忠告が

今から思えば私とかずやのプロローグだったのかもしれない。

カード

大家さんとのやり取りがあまりにも突然で、衝撃だった私は、部屋でしばらくまたボー然となっていた。

握り締めてる財布の中身ももう残り少ない。

このままじゃとてもやってけない・・・そう確信した。

私はそのまま階段を駆け降り、外に出た。

コンビ二の公衆電話から県住の自宅に電話した。

旦那は今日も夕勤のはず、だから普通だと今の時間寝てる。

電話に出てはくれないかも知れない。

ただどかけずにはいられなかった。

心臓がドキドキしてマジ破裂しそう。

呼び出し音は留守番メッセージへと変わった。

仕方なく切るうと思ったとき

『もしもし・・・』

旦那の声が聞こえた。

『もしもし・・・私・・・』

『・・・』

しばらくお互い沈黙してたけど

『なんなあ？・・・』

先に切り出したのは旦那だった。

『子供たちは？』

『元気にしとる。』

『今、どこに預けてんの？アンタの・・・』

『それはもうおめえには関係ね〜話だろ？・・・』

旦那が遮った。

穏やかにいきたかった。

そお心してかけたつもりでいたけど、その旦那の言葉に見事に打ち砕かれた。

『会わせて!!・・・何ならこれから子供に会いに行く!!』

『ふざけんなっ!!そんな勝手なマネ絶対に許さん!!』

『子供のこともすべて、もうワシと親でこれからのことは決める!!』

『勝手すぎるわっ!!子供のことアンタにわかるわけねーじゃん!』

『うるせえ!!仕方ねー、そう納得させるだけじゃ!!』

結局修羅場へと向かった。

『もうええ!!切るぞ!!』

旦那が言った瞬間

『私の物返して!!』

って言い放った。

『おめえのもの??』

『そこに山ほどあるじゃろ!!』

『・・・ふん!確かにな・・・あーそうか!!』

旦那はあざけるような感じで

『おめえにそーいやる用事があつた・・・』

『なによ・・・』

『銀行のカード返せ!!まさか使い込んでねーだろうな!!』

『・・・最悪!!』

こっちから切つてやる!!と思った時

『ええか!!よお聞けよ!!』

旦那が言った。

『明日ワシは休みじゃ。おめえに一時間くれてやる。』

その間に自分のもん運び出せ!!来るとき電話したら

そん時ワシは外に出とく。

必ずカードは置いとけよ!!じゃあな。』

そーいうと電話は一方的に切れた。

かずやが帰ってきてそのことを話した。

仕事終わったらすぐ、一緒にいこうってことになった。

その後、水道代のことを切り出してみた。

かずやはバツが悪そうに

『なんであやに言うわけ！？・・・』

ってブツクサ言っただけだ。

『これからはちゃんとしろ！』

かずやのふくれっ面に

『アーンパンチ！』

したら、すかさず

『バイバイキーン！』

って崩れ落ちた。

私は水道代のことなんかよりも

明日のことで頭がいっぱいだっただけだ。

樋口くん

次の日の夕方、まだ帰らないはずの時間にかずやはバタバタと帰ってきた。

『すぐ前の空き地に車停めたからすぐ行こう。』
『つていうから私は慌てて出かけることになった。』

『あや！俺、ツレと待ち合わせしとぉーけん。そいつ今日ヒマらし
いけんさ』

引越し手伝ってくれて頼んだら、かんまんでよ。メチャついとつ
たな（笑）』

『えゝっ！！引越して！？……。ツレっていわれても……。』
『この車に荷物なんか、ほとんど載らんだろ。アイツので運んでも
らうんよ。』

かずやが言うまで私、荷物の運搬のことなんて全く考えてもなかつ
た。

旦那に自分のもの運び出せといわれても、パツと浮かんだのは私の
服や化粧品や

小さなものばかりで。

正直言えば、旦那のもとから、県住から、去っていく覚悟なんてし
ているわけもなく。

旦那とは、売り言葉に買い言葉で……。

なのに、なのに……。なんだか……。

急にすごく不安になってきた。

『かずや！そのツレの人さあ、絶対びっくりするよ！！県住連れて
つたらさ……。』

引越していうか……。まるで夜逃げ！！それも主婦の夜逃げの手
伝い！？つて！！』

『いけるよ。大体説明しといたし。確かにアイツびっくりしたけど
（笑）』

津島の大学通りを走り、レンタルビデオ屋の駐車場に入った。
一人の男の人が車の横に立ってタバコすってるのが見えた。
車が停まった途端、その人がこちら側に歩いてきた。

かずやが窓を開けると、

『こんばんは。』

つて挨拶してきたから、慌てて私も挨拶を返した。

ちよい薄暗くて顔はよく見えなかったけど背が高くて
がっちりした感じの人。

かずやも車を下りてタバコ吸い始めた。

二人でなにか話してて、窓は開いてるけどカーオーディオの
せいでよく聞こえなかった。

突然その人が

『あのお、何歳なんですか？』

つて聞いてきた。

『えつとお・・・26です!!』

『へえ』

ニヤリとしてかずやを肘で小突いてる。

かずやが

『あやあゝそうやったっけえ？(笑)』

『ウソ!!29なんですよ。私・・・』

つて言ったら

『あ・・・えっ！?』

覗き込んで見る姿に爆笑。

『俺、樋口って言います。よろしくです。』

『神野あや子です。ほんとに・・・あの今日は突然すみません・・・。』

『あ、いえ・・・』

『んじゃあ、そろそろ行こ!!樋口い、ついてきてな!!』

かずやはそういうと車に乗り込んできて、私に携帯を差し出した。
『もお、かけといたほうがえんちゃう?』

『そ、そうだね。』

かずやの携帯は液晶になって、かけるのに戸惑ってる私を見かねてさつと携帯を取るとサッサと操作してまた渡してくれた。呼び出し音が鳴って三回ほどですぐ旦那が出てきた。

『もしもし・・・これから行こうと思うんだけど・・・』

『わかった。すぐか？』

『うん。三十分くらいで着く・・・。』

『後10分したらワシは出とく。終わったらまた電話せえや。』

『わかった。』

つつけんどうな言い方で淡々と用件のみ話して切った。

『なんて？』

かずやが聞いてきた。

『旦那そろそろ家、出とくって。』

『ふーん。』

かずやは差し出した携帯を受け取りながら

『樋口って俺の大学んときのツレでな、俺ら大学は違うんだけど

同じガソリンスタンドでバイトしとって・・・。アイツは愛媛出身

なんよ。

同じ四国やけんってのもあってスゲえ仲ええやつでさ・・・。』

そのあたりまでは言ってたのを覚えてる。

『な、あや！？聞いたお？』

『へ！？ああ・・・うん。』

その時、私はまた胃の辺りがキリキリ。

心臓はバクバクして、かずやの話を聞く余裕なんてなかったんだ。

箱の中へ

県住横の道に入り、かずやは当たり前のように私の家が見える位置に車を停めた。

見上げると、リビングの明かりはついていた。

（まさか、いないよね。）

なんともいえない緊張感みたいなもので気分が悪い。

車を降りて少し立ち止まった。

もうそれぞれの玄関先には灯りがついて、暗くなった外に人の姿はなかった。

歩き出した私の横をかずやと樋口くんが歩く。

「へえ。ここ県住・・・」

樋口くんはキョロキョロしながら周りを見てた。

「ここなんだけど。ちよつと待ってて！！」

石の階段のところで二人に言って私は階段を駆け上がった。

ドキドキしながらドアノブをひねるとドアはスツと開いた。

とろあえずホツとして玄関に入る。

階段の明かりをつけて上にまた駆け上がる。

懐かしい！！私の家！！そしてこの匂い！！

それほど散らかった様子はなかった。

ベランダから担ぎこまれた洗濯物干しにはシワシワのタオルが数枚だらしなくぶら下がってる。

ローテーブルの上にはコップやスナック菓子や空き缶が転がって、今すぐかき集めて片付けてしまいたかった。

ハッと我に返ると

階段を駆け降り玄関を開け放した。

「いいよ。」

私はすぐさま階段を駆け上がった。

樋口くんが玄関で

『おつ、お邪魔します!!』

『はあい!!どぞ!!』

・・・変な光景。

かずやが上がってきて

『先にデカイ物からいこう。』

って言った。

『俺はとりあえずコレ持ってきたい!』

(ファ、ファンヒーター!?)

『とりあえず、こっちの部屋と二つあるけどお・・・』

ためらう私に構わず

『じゃ、コレ一つは持ってこー!!』

手をかけたかずやに樋口くんが

『俺もってこか?中抜かなヤバイかな・・・』

二人で早速運び出し始めた。

(えんかなあ・・・?)

ためらいの気持ちはあったけどボヤボヤもしてらんなくて。

私は押入れを開けて、衣装ケースを取り出した。

その後タンスにかけてあるもの、引き出しにあるすべての自分の服を取り出した。

そして引き出しの中の5万・・・。

年に一回は家族でお泊りで出かけるために少しずつタンス預金して
るお金。

旦那はこれのお金のこと知らない。

お財布の中にその5万を入れて、忘れないうちに旦那名義のカードを
ローテーブルの上に取り出して置いた。

さて・・・次は!?

『なあ、あや!!この電話って使えんの?』

『電話??』

『ここにあるやつ・・・。』

開け放した押入れをかずやが指差してる。

『あゝそれねえ。んゝたぶん使えるかなあ……。』

私は夢中でドレッサーから化粧品をかき集めながら答えた。だから、かずやが衣装ケースの上にその電話をのせて運び出したのは見てなかったわけで。

いつか捨てようと思ってそのまま忘れてたボロ電話。

それがいずれ私の生活を支えてくれることになるなんて。

旦那に、こんなもんまでもっていきやがった！！って

思われるのが嫌だったけど、もう限界！寝袋生活には耐えられなかった。

来客用の布団と枕を持つてくことにした。

布団を取り出すと押入れからすっきり物がなくなった。

樋口くんが立てかけてある掃除機を指して

『これも？』

『……。お願い！』

結局アレもコレも持ち出ししてる私だった。

約束の一時間が迫っていた。

かずやと樋口くんが手際よく運んでくれて

もう運び出してもらうものはなさそう。

リビングに飾っていた写真立てをバックの中に入れた。

旦那のお気に入りの洋楽CDがスラリと並ぶラックの片隅に数枚私のCDがある。

全部イエローモンキー！。

つかんでバックの中へ。

『そろそろ出る？』

かずやが言った。

『うん。先に出てて。旦那に電話して行くから。』

かずやと樋口くんが出て行き、電話に手をかけた私はそつだ！キヨちゃん……。と思い、急いで寝室の窓から駐車場を見た。

（旦那さん帰ってるなあ）

だけど黙っては行けない。

急いでキヨちゃんどこに電話した。

電話に出てきたのは旦那さんだった。

『あ、あの・・・神野です。こんばんは。』

『あつ、こつ、こんばんは。』

旦那さんも私もぎこちない挨拶で・・・。

『奥さん、いらっしやいますか?』

『あのぉ、うちのお、今日は実家のほうに行っていていないんだけど・・・。』

『そつ、そうなんですか・・・。すみません。それじゃあ・・・。』

あの・・・えつと・・・いろいろご迷惑かけてすみませんでした。

それじゃまた・・・』

すかさず、旦那さんが

『あのー!』

つて言った。

『はい!?!』

『い、いや、何でも・・・俺が口出すことではなかったな・・・ごめん。』

『いえ。言ってもらってかまわないんで。』

『いや・・・いやぁ、やっぱりやめとく。・・・それじゃ。』

そういつて電話は切れた。

(・・・・・・・・・・)

旦那の携帯にかける。

『終わった?』

『うん。』

『あのさ、結構・・・持つてく。』

『ワシは別に構わん。カードは?』

『テーブルに置いてる。』

『そうか。おめえ、あさつての日曜にワシの家に行くように。』

『はあ!?!?・・・。』

『オカンがおめえと話してえらしい。絶対いけよ!! わかったか?』
『アンタは!?!』

『ワシ? いかんよ……。』
『……。』

『とにかくそういうことじゃ。電話してみりやえーがな。』

『えーがなつて……。ちよつと! マジ私……。』

『そういうことじゃ!! ワシ戻るけん、出るように!!』

『あ! ちよつと待つ……。』

電話が切れてボー然。

そのまま階段を下りて……。ドアを開けて外に出た。

そしたら隣の家のドアが開け放されて……。。

隣の中学生の子が塾に行くらしく、下でお母さんが出てくるのを待つてゐらしかつた。

さりげなく

『こんばんは。』

つて挨拶して足早に通り過ぎる。

そして車に乗り込んだ。

『よつしやあ、行くかあ!』

かずやは、ご機嫌で車を走らせてる。

私……。最悪な気分で窓の外を眺めてた。

『あや? どしたん? 疲れた?』

『うつん……。』

『樋口な、先に行って荷物を下ろしてくれよおくるけん。』

『えっ!! そうなん!!』

全く気づかずにした。

『荷物下ろしたら樋口んとこ行こう!! 風呂も入らしてくれるってよ。』

『え!?! ウソでしょお!! 迷惑だつてえ!!』

『アイツが来いってゆうたんやもん。えゝでえゝ。』

『でもお……。』

家の前の空き地に着くと、樋口くんの車の後ろのドアは開いてて既にもうほとんど荷物ない・・・驚いた！！

かずやの車の荷物もさっさと運ばれてく。

私は残された小さなものを持って入るだけ。

大家さんが窓を開けて、びっくりした様子で見守ってる。

荷物を全部入れ終わった。

部屋の中はびっくりするほど物であふれかえっていた。

『すっ！すげえ！！』

啞然とする私達三人だったけど、車を早く移動させなきゃいけないから

部屋はそのまま、バタバタと下に降りた。

『樋口くん！お邪魔してほんとにいゝの？』

『いゝよ！いゝよ！全然つかまわないから。』

そういつて樋口くんは車に乗ると先に行ってしまった。

『ねえ、なんか買っていこ！樋口くんにもお礼したいし。』

『そおすつかあ！！』

私とかずやはビールとか食べ物とか沢山買い込んで

樋口くんとに向かった。

元カノ

『お邪魔しま〜す!!』

樋口くんは学生専用コーポに住んだ。

1DKの間取り。

いろいろものがあるのに、それが綺麗に整頓されてて
落ち着いた感じの部屋。

『まっ、適当に座つてよ。』

『樋口くん、今日はほんとにありがとね。とりあえず適当に見繕つてきたんで・・・』

つて言いながら、ローテーブルに買ってきたものを並べてった。

『おー!!!まじでえ!!!』

樋口くんは嬉しそうに覗き込むと急いでコップを用意してくれた。
とりあえず何はともあれ

『乾杯つ!!!』

つてことで。

樋口くんと私は迷わずビール。

かずやも迷うことなく、また例の和歌山みかんジュースで。
かずやが全くお酒飲めないってこと、この時初めて知った。

『おつかれえ!!!』

樋口くんは勢いづいたらしくグイグイ飲んでる様子。

『樋口くん、彼女いるんでしょ?』

『いやあ、いないからあ・・・紹介してくださいっ!!!』

『いるよ、コイツ!!!』

私の頭の中に

(日曜・・・旦那の実家・・・姑と話)

つてのは確実にインプットされてて、気持ちも確実にブルーではあったのだけど

それもかなり紛れるくらいに、三人楽しく盛り上がった。

そのうち樋口くんもかなり酔ってきたのか

『あゝ今日はかなり飲みすぎたかも・・・』

つてテーブルに突っ伏した。

不意に樋口くんが頭を持ち上げて

『沢本おゝあのさあ、藤川美佐ねえゝ俺のお・・・』

『はっ！？樋口！？おまえ！？・・・』

かずやが慌てて私の方を見た。

『ん・・・あ！・・・』

樋口くんも慌てて私を見た。

『何！？なに、二人であせてんのお・・・。はあゝ！わかったあ
！！』

かずやの元カノとか？？・・・そうなんですよ、かずや？』

『あ、あくまで元・・・やけんな。』

『そうなんだあ！！！それでえ？樋口くん！！続きをどーぞ！！』

樋口くんは多少おどおどしながら

『えっ？いゝの・・・沢本？』

『いーのいーの！！ね、かずや！！』

『別に・・・まあ・・・』

『あのお、今ね、俺と同じ学部のやつと付き合ってるみたいなんよ。
で、噂で聞いたんやけど

抱いてる最中にね、藤川の顔見たら萎えちゃうからさ、枕押し付け
て顔隠してやってるらしいよ。』

『・・・。。マジで？』

笑ったつもりなんだろうけど、かずやの顔はひきつってる。

『ふゝん。そゝなんだあ。そんな感じの子と付き合ってたんだあ。
もつと知りたいなあ。

樋口くゝん！！おしえてえゝ！！』

『あゝいいよ！！いいよお！！』

ふざけて樋口くんと私がやたら近寄ったのを見て

『こらあ！！あやあ！！だめだつてえ！！！！』

かずやは私を後ろから抱え込んで急いで引き離れた。
そして私と樋口くんの間に座った。

藤川美佐。かずやの元カノ。

でも・・・ただの元カノじゃなかったんだ。

私はもちろん、樋口くんさえ知らない

ややこしくて複雑な関係で

かずやと元カノは繋がっていたんだ。

その後、かずやと一緒に樋口くん家のお風呂に入った。

まるで彼女の存在を証明するかのように置かれた洗顔クリームとか化粧水が可愛い。

また今度三人で飲みに行く約束をして、私達は帰った。

部屋に戻って、とにかく布団を引くスペースを確保するため

使っていない部屋に荷物をとりあえず入れておくことにした。

無事部屋にファンヒーターを置き布団を敷いた。

ファンヒーターは狭い部屋をあつという間に暖めた。

布団ってこんなにフカフカやったっけ!?

なんだかメチャ贅沢な気分。

体をうずめると、そのまま吸い込まれるように

私とかずやは眠ってしまった。

すべては明日

次の日は朝から、運んできた荷物の整理に忙しかった。

バタバタしながらも、明日はどうすべきか、ひたすら悩んでいた。必然的に旦那の実家には電話をかけなきゃいけないよね。

また私の胃はキリキリと痛みだしていた。

姑は仕事休んでるのだろうか？

旦那の実家に行くだけでなく、さらに姑と話をしなくちゃいけないなんて・・・。

これ以上気が重いことなんてないんじゃないかと思うくらい・・・。

だけど、子供に会える可能性は十分。

それだけが私の希望、そして目的。

そのためには、どしたらいいの・・・。

だけど、考えててもしょうがなくて、とにかく電話を掛けに出かけることにした。

『ただいま!!』

かずやだった。

『どしたの!?!』

『今日は暇やけん、昼帰れたんよ。どっかいくん?』

『ちよつとお・・・コンビニ。』

『じゃ、一緒にいこ!』

『それがね・・・。私、電話せんといけんくて。』

『誰に?』

かずやに明日行かなきゃいけないことを話した。

『じゃ、ちよつと行って来るね。』

『待ってあや!!ちよつと、こいだ!』

そついうと、かずやは階段を上がってった。

部屋に入るとテレビの横で、かずやがガサゴソやってる。

『やったあ！使えるわー！』

それは、あの押入れのボロ電話だった。

『持ってきてたん！？』

『昨日繋いでみようと思うて忘れとったんよ。かけるか？』

『ううん。・・・今はいい。ねえ！かずや、やっぱコンビニ行かない？おなかすいたあ。』

『よっしゃ、いこうぜー！』

コンビニへの行き帰りは晩御飯の話で盛り上がった。

今夜、初めて私が作ることにしたからだ。

かずやが帰ってきたら一緒に買い物に出かけることにした。

かずやはいっぱい食べたいものがありすぎて結局何にするのか決められなくて。

帰ってくるときまでに考えとくつて、また仕事に戻っていった。

そろそろほんとに電話をかけないと。

電話の前に座る。

改めてみると電話はホコリまみれだった。

テッイシュでふき取って、完璧。

しばし、意味なく眺める。

（これ以上考えてたらドンドン掛ける気失せそう。）

もっ！！！勢いで行くしかない！！

深呼吸してそのまま何も考えないように・・・サクサクと番号を押す。

緊張しすぎで受話器を握り締めた私の体は完璧硬直状態だ。

三回の呼び出し音の後、ガチャッと音がしてドキッ！！！！

その途端、留守番メッセージが流れた。

即切りっ！！！！！！

（なんで！？なんで！？なんでいないの！？）

子供つれて買い物？それとも旦那が急に休みとって帰ってえ、それでえ・・・

たちまち私の頭の中であらゆる可能性が思い浮かび、ごちゃ混ぜ状態。ほぼパニック。

時間おいてまた掛けてみようか？

もしかしたら仕事？だとしたら子供たちは？

結局、旦那の携帯に掛けてしまう私だった。

でも旦那・・・出なかった。

私はバックからスケジュール帳を出してきて開いた。

そしてまた電話をかけた。

『はい。〇〇病院です。』

『あのお、4階の詰所お願いします。』

しばらく待つと

『はい！！4階ですけど・・・。』

『あ、あのすみません。神野と申しますけど・・・あ、あのお』

『あゝ。・・・婦長さんですかね？あ！お嫁さんかな？（笑）』

『あつ！！はいっ！！いつもお世話になってますっ！！』

『こちらこそっ。ちょっとお待ちください。病室行かれてるので呼んでますね。』

『あつ！！はいっ・・・。』

（いつ、いるじゃん・・・。）

『もしもしい。』

聞き慣れた少し甲高い声・・・姑だ。

『・・・お母さん。』

『あやちゃん、ヒ口から明日のことは聞いたわなあ？』

いつもとなんら変わらない口調だった。

『はい。』

『明日何時ごろ帰ってくるん？』

・・・なんか違和感・・・

『あのお・・・お母さんの都合に・・・合わせます。』

『そうじゃなあ・・・それならあ・・・午後からってことにしようか。』

『わかりました。あ、あのっ……お母さん！……子供たちは？！』

『それは明日話そうや。』

姑はびしゃりと言った。

『それじゃ、明日。』

私にそれ以上の返事は不要とばかりに電話は切れてしまった。

（明日は、電車で帰ろう。それからバスで……。

いろいろ考えるのはよそう。もっ、すべては明日なんだからさ。）

かずやに潜むもの

結局かずやが食べたいのは野菜炒めだった。

二人で近くのスーパーに出かけた。

帰ってきたらトイレの真横で

早速食事に取り掛かった。

かずやは随分使っていない小さい炊飯器を

出してきた。

『イケルかなあ・・・。』

『駄目ならご飯だけまた買いに行くしかないね。』

せまいし、一人で大丈夫だから待ってて。

っていうのに、かずやはピツタリ私の横にくっついて見学してる。

小さな流し台の上で、まな板は半分しか載っていないシーソー状態。

それでも何とか、かずやと二人で材料を切って用意した。

その後、炒めるのは下で。

床に直置きされた一口コンロ。

二人、今度はしゃがみこんで順番にかき混ぜたりしながら・・・。

無事完成！！

炊飯器開けるのはドキドキだったけど、

難無く無事炊けてた。

テーブルには野菜炒めとご飯だけ。

それだけのものに、感動しまくるかずや。

ガッツガツ食べる姿に確かに嬉しい気持ちはあったんだけど・・・。

私の心はなんだか沈んだ。

食事が終わって片付けるときも、かずやは一緒にいてくれた。

片付けてる途中でかずやが

『明日は何時？』

って聞いてきた。

『お昼くらいの電車でいくつもり。』

『えゝ!? 明日は、俺が車で送ってくよ。』

『。。。それは無理。だって明日向こうのお母さんと話しなきゃいけないし。』

『それなら待つとくけん、かんまん。』

『待つとくつていったって。時間なんて全くわかんないから。』

『イケルよ! ぜんぜんつ。』

『明日の話の内容にもよるけど、かずやを待たせてると思うと、気になっちゃうしさ。明日はとにかく一人で行くから。』

『。。。なあ、あやあ、明日。。。俺んとこまた帰ってくるんよな?』

『かずやあ。。。そんなん心配してんの?。。。』

『。。。なあ、帰ってくるんだろ?。。。』

『電話ちゃんとするからあ。。。待ってて。』

その時の私は帰る、帰らないなんてことは全くカヤの外のこと。

明日の姑との話のことしか頭の中にはなくて。

別に深い意味合いもなく、かずやに受け答えしてたんだけど。。。。

『明日は絶対つ、俺も一緒にいくけん!!』

『。。。』

『な、あや!! わかった?』

『。。。』

洗い上げる私の手は止まった。

そして思わず、かずやをキツと見据えて

『ほんとにだめだつてえ!! マジで!!』

『。。。』

突然、かずやが私の手を乱暴に握った。

そしてすごい力で私を部屋のほうに引っ張って歩き出した。。。。

『いつ!! 痛いっ!! かずやあ!!』

握られた手を引っこ抜こうとしたら、さらに強く握り返された。

私はほとんど引きずられるような感じで部屋に連れてかれた。

そして突然仰向けに押し倒された。

畳の上だっただけ、ガツン！と頭に鈍い衝撃がきた。

かずやは馬乗りになって私の肩を押さえ込んでいた。

私を見下ろすかずやの顔は怒ってるんじゃないくて

ボー然としてるように見えた。

『かずや……。どしたん……。』

私の声は震えた。

かずやの返事はない。

押さえつけてるかずやの腕を私はそつと両手でつかんでみた。

その瞬間私の目からは涙がこぼれて、思わず声を上げて泣き出してしまった。

スツと、私の体は自由になり、

『あや！……あや！……ごめんな。』

つてかずやは私を必死に抱きしめてる。

泣き止もうとしたけど出来なかった。

抑えようとしても抑えきれないものがどんどん込み上げてきて

自分でも訳がわからなくなるくらい私は泣いた。

途中でかずやを振り払い、背を向けて泣いたから

その間かずやがどうしてたのか知らない。

ようやく気分が落ち着いて、体を起こしたら

ひどい鼻づまり……。ズキズキ頭が痛い。

ヒクヒクとしゃくりあげながら

ボー然と座ってる私の隣に

かずやは静かに座った。

『……。お風呂いきたい……。』

『い、いくか……。』

ヨロヨロと私は立ち上がり準備した。

その間も、行く間も、私達に会話はなかった。

ただかずやは黙って心配そうにに寄り添ってた。

随分長いこと入ってたかなあ……。

銭湯を出たら、かずやの姿はなかった。

(多分待ちきれなくて帰ったんだ。)

一人で帰るの・・・それはそれで気が重い。

部屋のドアを開けるとかずやは

『おかえりい』

って言った。

部屋中にキツイくらいに甘い匂いが漂ってた。

『何！？この匂い？』

『これ・・・さっきコンビニにあったんよ。』

アロマキャンドルやって。』

『へえ〜綺麗・・・』

『だろお。アヤが喜ぶかなあと思ったけんさ。』

『・・・。ありがとう。』

かずやは私を抱き寄せてキスした。

『あや・・・中にしていい？・・・。』

『ん〜・・・。・・・が、ま、ん・・・。』

かずやの息使いがどんどんあらくなって、スツと私に覆いかぶさってきた。

『かずや・・・もしかして・・・イッた？』

『イッたあ〜。』

『・・・どこに？』

『・・・なかあ。あやの阿波弁って興奮する!!』

『阿波弁???』

『かんまんっていうただろ?』

『がまんって言ったのに!!』

『えっ!?マジ!?』

急いで計算してみた。

多分大丈夫・・・。

『なあ、あや出来たかなあ?』

めっちゃワクワクした様子でかずやは聞いてきた。

『さあ、どおだろ（笑）・・・』

かずやは私のおなかに手を当てて

『期待してますっ!!』

って言った。

『・・・。ばっかじゃない（笑）もおマジ私寝る!!!!』

『なあ、あや・・・明日やっぱだめ?』

『・・・。好きにしたらあ。』

『やったっ!!!』

なんかいろいろ有りすぎて・・・。

疲れてた。ほんとに・・・。

そんな私だったから

かずやに潜んでるものが見え隠れし始めたことに

気づくはずもなかったんだ。

思い想いの北

次の日、かずやの望みどおり私は車で送ってもらうことにした。旦那の実家、そして私の実家も、延々高梁川沿いを北へ北へと走ってかないといけない。

旦那の実家と私の実家は同じ市内にある。

私と旦那は出身も通った高校も同じ。

私の実家は、道なりに行けばありますから……っていえば多分土地勘無い人でも

さほど苦労せずいけそうな場所だけど

旦那の実家はすごい山奥。いわば僻地。

私の親が初めて旦那の家に行く際に

『よりによつてこんなところに嫁がんでも……。』
つて思わず愚痴ったほどだし。

そんなことがあったから、なおさら、かずやに送ってもらうのは嫌だったのになあ……。

『かずや、旦那の家さあ、実はかなりヤバいくらいすごいところにあるんだあ。』

『でもさあ、路線バスは通るんだろ？』

『まあ、そりゃね……。』

『じゃ、イケルやん!!』

『……。多分想像絶する。覚悟しといて!!』

『わかった(笑)』

かずやは全然平気そう。

私かというと

『はあゝもお最悪う……。』

同じことばかり何度もつぶやきながら

何回もため息ついてた。

そうしないと緊張でカチコチになっちゃいそうだったから。

その度に

『イケるか?』

つて聞くかずに

『ムリっ!』

つて即答。

車の中では、そんなことの繰り返しで・・・。

そして遠くに町並みが見えてきた。

『ねえ、かずや! 大体こんなとこ来たことないでしょ?』

私はかずやの返事が

『うん。』

に決まってると思いつつ聞いた。

『いや・・・俺もつと北のほうに行ったことある。』

『え?! そうなん。いつ?』

『大学んとき。』

そうかずやが言った時、私の頭のなかには

大山とか蒜山の景色が浮かんで

(大学のサークルでも行ったんだな。)

つて勝手に解釈して納得したもんだから

『ふん。』

つて話は終了した。

あの時

『なんで?』

つて聞いてたら、かずやはなんて答えたんだろう。

行ったことある・・・。

正しく言えば、通ってた・・・だよ。

とうとう車は市内に入った。

『かずや、ここからはバスで行くから、何にもないところだけど

何とか時間つぶしててくんない?』

『え?! ここからもう近いの?』

『違うっ!! 遠いの!! まだ、かなりね・・・。』

『じゃ、このまま送ってくよ。』

『でも……。』

『大丈夫やって!!』

結局そのまま行くことになった。

最初は自然公園、キャンプ場へと続く広い道を上へ上へと
のぼっていく。

だけど、そこを超えると道はどんどん細くなり山中を
走るみたいになるのだった。

『げっ!!マジギリちゃうん!!!!』

かずやの方が断然うるさく騒ぎ出した。

そして、こちら辺りから、腹をくくった私は

断然大人しくなってしまうた。

『かずや!あそこにバス停あるの・・・見える?』

『あん?どこ?』

『なんか立つてるでしょ……。』

『あ、あれか!』

『あそこで下ろして!!』

かずやはキョロキョロしながら

『家なんてどこにもないやん!!』

って言った。

『着いたらわかるよ。』

車はバス停についた。

というか、ただ道に

バス停の標識みたいなヤツが立ってるだけだけど。

私は車を下りた。

『かずや、あの向こうの青い屋根が旦那の家。』

かずやは運転席から乗り出したけど、見えないといって
車を下りた。

私は指差しながら

『この坂をずっと下ってって、向こうまでいくわけ。』

『谷底みたいやな（笑）・・・』

『かずやはこのまま走ってって・・・そしたら広い道に出るから。そのあたりに運動公園があるの。そこの駐車場で待っててくれない？』

『うん。わかった!!』

『どのくらい時間かかるかわかんないけど、かずや大丈夫?』

『俺はイケルけん!! あやこそイケルか?』

『うん。大丈夫!!』

『それじゃな。』

『うん。それじゃ後で。』

走り出すかずやの車に手を振った。

そして私は旦那の家に向かい歩き出した。

究極の選択

旦那の実家のまわりには家が点々と4軒ほどあった。

そのうちの一軒の前を通り過ぎれば、その向こうが旦那の家。子供の声が一瞬ハツとした。

でもそれは、家の前で遊ぶ、その家の小学生の声だった。

足早に通り過ぎ、旦那の実家へと続く細い坂道を歩く。

家の前にはいつもながら洗濯物が沢山干してある。

でも、その中に子供のものは全く見えない。

外には誰の姿もなかった。

旦那の家は母屋と離れになっていて、離れのほうからテレビの音が今日も変わらず漏れ出していた。

（離れにいるのかなあ・・・。）

そう思った時、ガシャッと食器の音が聞こえた。

一瞬ためらったけど・・・ここまで来て、それも庭先で・・・。
立ちすくんでいたって仕方がない！！

スタスタと勝手口まで歩き、思い切ってドアを開けた。

開けた途端、流しの前に立つ姑と目があつた。

『あ・・・こんに』

私は一瞬ためらってから挨拶しかけた。

『おかえりい。』

と姑が言ったから

慌てて

『帰りましたっ・・・』

そのまま立ちすくんだ。

『どしたん？（笑）おあがりい。』

『あっ、はい・・・。』

私が予想していた姑とはあまりに違う・・・。

『今、父さんとご飯食べたところなんよ。．．．
ちよつと待つてえ！』

『すぐ片付けるけえ。』

『あ、はいっ。』

『どうやって帰ってきたん？』

『えつとあー！電車とバスで．．．。』

『つて言うしか．．．ないしね．．．。』

そして姑は食器を洗い終わると、お茶を入れ

『ほんなら、あつちで話そうや。』

つというとき接間に入つていった。

向かい合せて座ると

姑は私を見て

『ヒ口からなあ、大体の話は聞いたんじゃけどなあ．．．』

と話を切り出した。

『あやちゃんに彼氏が出来たというか．．．男の人が出来たつていうのが』

私には信じられんような．．．信じたくないような感じ．．．。

あやちゃん、それはほんまの事なん？』

『．．．。』

すぐには答えられなかった。

でも．．．思い切つて

『ほんとです。それは．．．。』

つて答えた。

姑は深くため息をついた。

『そうじゃとしたらほんと．．．私もショックじゃわ．．．。』

今日はその彼氏のところから来たというわけじゃわな？』

『．．．はい．．．。』

しばらく姑も押し黙ってしまった。

でもまた思い切つたように

『その人は何をしようる人なん？』

つて聞いてきた。

かずやの仕事のこと、年齢のこと・・・聞かれたことには出来るだけ有りのまま話したつもり。

姑も落ち着いて穏やかに聞いてくれた。

『ヒロはな、あやちゃんとは離婚しようと思うとるらしんけど、あやちゃんはどうするつもりなん？』

姑は私の目を見て聞いた。

『私は正直言えば・・・家を出た時点ではそこまでは・・・でも・・・』

今は・・・ヒロがそういうならそう』

『そうじゃないじゃろう!!』

ぴしゃりと姑が私の言葉を遮った。

『離婚とかそんなことは置いといて、』

アンタらのすべきことは子供を育てるってことじゃろ!!』

『・・・・・・・・。。』

今度はずっと長い沈黙があつた。

『子供らはずっとあやちゃんを待つとんよ・・・』

『あのお、お母さん子供たちは？』

『あれからはずっとあやちゃんのお母さんにお世話になつとんで！』

ヒロは私に見てくれって頼んできたけどお・・・。

私もすぐにすぐ仕事をどうの出来るわけもねえし・・・。

アンタとこのお父さん、お母さんだつて

仕事されとるんじやから迷惑かけるとは思つたんじやけどなあ・・・。

『。。』

それを聞いて私は心底ほつとした。

この状況なら私と子供たちが引き離されることは、やっぱりない!!
と私は確信出来た気でいた。

『それでな、あやちゃん！アンタは今日から子供らと、ここでお暮らしい。』

『・・・・・・はい！？えっ！？・・・・・・』

『これから子供を迎えにいつておやりい。今日からアンタらの家はここなんで。』

父さんもそのつもりでおるしな。』

『そつ、それはっ！！・・・・・・だいたいヒロだつてそれはっ』

『ヒロはなあ、それでええつていうたんよ。』

ヒロはな、もうこっちには当分帰らんようにするつていうたわ。

万が一帰ってきたつて、ヒロのことはほつときゃえんよ（笑）

あやちゃんの子供のことと自分のことだけ考えときゃえんよ！！』

旦那にとつたら、最高の条件だろうと思つた。

そう思つた時、旦那に対して今までにないほどの嫌悪感がわいてきた。

とつさに

『それは絶対に出来ませんっ！！』

と答えた。

『それなら私は実家で子供と暮らします！！』

お母さんたちが子供に会いたいときはいつでも連れてきますし。

それに今、私・・・・相手のところにいるわけで。

もう荷物まで運んじやつて一緒にいるので・・・・そちらとも話しない』

『相手んとこに運んだ荷物なんて、あげとけばええが！！』

『でもお母さん！！あまりにも中途半端です！！』

それなら離婚のほうが私はいいですっ！！。』

『子供が大きくなつたらどうしようとして私らも構わんで！！』

でも今は全く納得できんわな。

大体・・・・あやちゃん！

仕事も持たず子供と暮らせるなんて、そんな考えがおかしかる！？』

『仕事はすぐ見つけます！！絶対に！！』

『さあ、そう簡単にいくとは思えんけどなあ・・・・。』

結局、姑と激しい押し問答になつた。

『とにかくあやちゃん!!』

それが出来んというなら子供とは一切関わって欲しくないんよ!!
あやちゃんが子供の為にそれが出来るか?! 出来んか?!

それが全てじゃわ!!』

『急にそんなこと言われても、今どうかと聞かれたら
出来ない!!』と答えるしかないですっ!!』

突然、ドアが開いてハツとした。

舅だった。

姑は舅が隣に座った途端、

『あやちゃんはここに住むってのは出来んらしんよ。』
って言った。

私はすぐ

『今日、今、すぐに、って言われても・・・』
って言い返した。

少しの沈黙の後、舅が

『今日いくらこれ以上話しても、ムリじゃろう。』

お前もあやちゃんに言いたいことは全部言えたんじゃろうが?』

『それはそうじゃけど・・・。』

姑は不服そうに言った。

『それじゃったら、あやちゃんもそれなりに考えるじゃろう。』

今日が今日でなくてもえんじゃねんか?』

姑は少し考えてから

『今日帰るとしても、あやちゃん!! 実家には絶対に行かんでよ!!
子供らと接触は絶対にせんという!! それだけは約束して帰って!

!!』

『わかりました!!』とにかく私は仕事をすぐ見つけますから・・・』

『・・・・・・。あやちゃんなら即答してくれると思うんだけどなあ・・・。』

アンタがそういう子じゃとは思わんかったわ!!』

最後にそう姑は言い放つと、黙り込んでしまった。

私はスクツと立ち上がりそのまま旦那の家を出た。

それ以降、私が旦那の家の敷居を跨ぐことは二度となかった。
姑にとってはこの日の私の返事こそが全てだった。

途中コンビニで求人誌を数冊買い込んでかずやと家に帰った。
かずやが今日のこと訊ねてきた。

『とにかく仕事見つけないと子供に会わせてもらえない・・・。』

速攻見つけたら速攻迎えにいつて一緒に暮らすけど、かずや、いい
!?。』

『いいよ!!あやあ!!頑張ろうな!!』

浅はかな私・・・。

この日のことは永久の後悔となった。

そして今も私にのっかっている。

あらしの前の・・・

かずやの家に帰ると、大家さんが私達の帰りを待っていたかのよ
うに玄関口から出てきた。

『今日はどこか出とつたんなあ。（笑）』

『はい！！今帰りました。』

って私は答えた。

そのまま通り過ぎようとした私達だったけど

『ちよつと！・・・お兄ちゃんええかな？』

って大家さんに呼び止められた。

『あつ・・・はい！！』

かずやは大家さんとこへ、私はそのまま部屋へと戻った。

私は早速求人誌を開いて、見始めた。

少ししたら、かずやが帰ってきた。

私は夢中で見てる最中で、

かずやは私の隣にうつぶせに寝転がった。

『大家さん、なんて？』

『別に大した用でないよ・・・ちよつと家のこと聞かれただけやけ
ん・・・。』

『そうなん。』

一応聞いてみただけで、私は別に気にも留めてはいなかった。

しばらくして、ふと見ると、かずやはまだ寝転がったままだった。

『さすがに疲れちゃった？かずや・・・』

返事はない。

『寝てんのお・・・。』

かずやの背中から覆いかぶさって覗き込んだら

『・・・うつ・・・おっ、おもい・・・。』

『なんだあゝ。返事くらいしろよっ！！（笑）』

そのまま思いつきり体重をかけてやった。

かずやはその後ムクつと起きて、別の求人誌を取るとまた寝転がった。

私もかずやの隣に寝転がって一緒に見た。

『良さそうなところあった？』

『やっぱどうしてもねえ、販売系見ちゃうなあ。』

でもあんまないんだあ・・・今回はハズレかも・・・。

『・・・。。』

『聞いてる？私の話・・・』

『あつ！！俺・・・ここ行きてえ！！！！』

その後なぜか、かずやも必死に見た。

『あるとしたらここかなあ。派遣みただけど・・・。

駅裏だから近いし・・・。』

一箇所だけ気になるところが見つかった。

『どれ？見せて！！』

『ふーん。えんちやう！？』

『あんまりわかってないでしょ！？』

『バレたあ（笑）』

『かずや、あのさあ・・・』

私また電話の仕事もやるうかと思うんだけど・・・いい？』

『俺はかんまんけど。なんで？』

『もち、きちんとした仕事はするんけどあ。

少しでもお金稼げるなら稼ぎたいなあって・・・。』

『そつか！ええよ。でも電話変わってもいけるん？』

『そこがわかんない。明日にでも問い合わせてみる。』

『・・・俺もさあ、またバイトしようかなあ・・・。』

『えっ、何の？！』

『家庭教師。俺、一応まだ登録してあるんよ。』

『なっ、なに教えんの！？かずや！？』

『理、数。』

俺、大学、理系やったもん！！』

『すっごおっ！いい！！私、全くうー理系駄目なんですけどおっ・・・』

『

『教えたるか？手取り足取りい（笑）』

明日・・・こんな空気なんてぶっ飛んじまっようなことが起きるなんて・・・。

振りかかるもの

次の朝、いつものようにかずやは仕事に出て行った。

私は洗濯機を回してる合間に、早速コールセンターに電話してみた。岡山県内の電話なら全く問題なくて

今までとなら変わらず仕事は出来るらしく

すぐにでもどうぞって言われた。

とりあえずホツとした。

洗濯物干したら、早速仕事しよう!!

そして昨日の求人誌をまた開きかけた時、突然電話が鳴った。

(えっ? 誰っ!?)

びっくりして、どうしようか迷ったけど……。

「……もしもし?」

「あや!!」

「……なんだあゝかずやあ!! びっくりさせんでよあ(笑)!!」

「あや……あのさあ、ちよつとお、これからそっちに帰る。」

「は? 今?」

「うん。それでなあ……ちよつとお……人が来るんよな……」

「……え?! ここにい? 誰!?」

「……社長のあ……奥さんなんけどさ……」

「……えっ? 何っ? ちよつ、意味わかんない!!! かずや?

! なんて?」

「とりあえず部屋ん中つまえといてっ!! わかった?」

「何っ? 何っ!? 部屋をなんてっ!?!」

「片付けといてってこと!!……それじゃ。」

「ねっ!! かずや!!……」

かずやは一方的に電話を切ってしまい、私は

全く訳がわからなかったけども

とにかく片付けなきゃいけない!!! ってことだけはわかった。

布団をたたんで急いで隣の部屋に入れ込んだ。
転がってるものも、とりあえず隣の部屋に。

それだけで何となく片付いた感じにはなった。

（なんで社長の奥さん？・・・いったい何の用事なんだろ？）

すぐく落ち着かなくてソワソワしてたら、下で音が聞こえた。

（えっ？！どしたらいいわけ！？）

とにかく立つてるのも変！と思った私はペタリと正座した。

扉を開けたのはかずやで、

『お邪魔します！！』

つて女の人が先に入ってきた。

私はそのまま会釈した。

その人は靴を脱いで、私の向かいに正座して座ると

『沢本君も入って座りなさい！！』

つてかずやに言った。

かずやは私の隣に座った。

その人は私のことをまじまじと見た。

『初めまして！！私は沢本君の勤めてる写真館の、宮元の、家内です。』

失礼ですが貴方、お名前は？』

『・・・はい・・・神野あや子と申します。はじめまして！！・・・』

苦手か？と聞かれたら、すごい苦手！！と即答できる。

その人は高校の時の厳しかった先生を彷彿させた。

キリッとした姿勢で真っ直ぐにこっちを見て話を続けた。

『昨日、買い物に行ったら大家さんにたまたま出会ったんよ。』

挨拶でもと思つて、立ち話をしたら、貴方のことを聞いて本当にびっくりしました。

全く・・・こんな事になつてるなんて思いもよらなくて・・・。
それで、今日、沢本君にも確かめたらやっぱりそうで・・・。

主人も私もほんとにびつくりで・・・なあ、沢本君？」

「・・・・はい・・・・すみません。」

「聞けば貴方・・・・結婚なさっててお子さんもいらっしやるんてね。」

「

「・・・・はい。今はまだ・・・・。」

「・・・・。ここにいる場合じゃないでしょう?!ほんとに・・・

そうは思わない?」

「・・・・。それはそうかもしれませんが・・・・。」

気まずい沈黙だった。

「・・・・。それはでも・・・・貴方の問題ね。」

私がとやかく言う資格はないわね・・・・。」

「・・・・。」

「ところで沢本君から、このことは聞いてる?」

「いえ・・・・。」

「ここはねえ、私達のほうで大家さんから借りてるところなの。」

沢本君、一人が住むという契約の上で借りてるわけ。

そのことはね、今まで重々沢本君にも言ってきたよね?

そうでしょ?」

「・・・・あつ・・・・はい。」

「だから貴方が住んでるといふのは契約違反なわけ。」

わかるでしょ?」

「・・・・。はい。わかります。」

「大家さんはねえ、沢本君が私達にあらかじめ言ってるもんだとばかり

思ってたみたいでね。だから大家さんもびつくりして・・・・。

その後、大家さんがうちに電話してこられてね。

私は全然構わないから、ここに貴方を置いてあげてくれて頼んでこられたんよ。

でも、私達・・・・それを認めることは出来ません!!

だから、貴方には早急にここを出てもらわないと・・・・。

わかつて頂けるかな？」

「……はい。」

「それをお願いしに来ました。

貴方も突然でびっくりしたとは思っけど……。」

そういうと、その人は立ち上がった。

頭の中真っ白……

だけど、私も……立ち上がった。

「それじゃ、よろしく願いますね。」

会釈されたので、反射的に返した気がする。

その人と一緒に、かずやも出て行った。

私はそのまま、ぼー然とその場に座り込んだ。

突然振りかかってきたものに

全くどうしていいのかもわからなくて……。

一体何がどうなってんのかもわかるわけもなく……。

そんな私の上にはまだ……さらに容赦なく

振りかかるうとするものが

この時にはすでに並んで順番待ちしていたんだ。

パンドラの箱

どのくらいそうしてたかはわかんない。

私はフラフラと立ち上がると、フスマを開けた。

急いで乱雑に入れ込んだ布団は崩れて、部屋を占領していた。

それを見た途端、思わずまた、へたり込んでしまった。

私の頭のどこかにはまだ、わずかに、何とか頑張んなきゃ・・・という気力が

あるような気はしたけど、無気力になってしまった体は思う通りに動かなかった。

昨日、大家さんが私達を待ってた訳も

今日社長の奥さんが突然、訪ねて来た訳も

よくわかった。

だけど、かずや・・・なんで？・・・。

なんで言ってくんなかったの？・・・。

こうなると無性にかずやに腹立ってきた！！

私は、敷布団の端っこを握りしめると思いつき、力任せに引き抜いた。

同じように掛け布団も、・・・。

どうでもいい！！散々散らかっちまえばいいし・・・。

何かはわかんないけど下敷きになってるものは見事に混ぜ返されてる気がした。

やっちまって少しはスッキリした気になったものの、さほど時間もたたないうちに

どうにも落ち着かなくなってきた。

結局また元の部屋に、敷布団を引き込んでたたみ始めた私。

あゝあ・・・何やってんだか・・・。

敷布団、掛け布団とたたんで、最後の毛布を手を取ったその拍子にガッツと下で何かがバラけた。

大き目の白い菓子箱のフタが私の足元にはあった。

そして、向こうの箱からは、可愛い封筒が何通が溢れだしていた。箱の前に座り、封筒を取った。

そしてそこからたちまち、私の頭と体が再び活発な稼働を始めた。

岡山市津島・・・マンション・・・

沢本かずや様

今とは違う住所・・・大学生の時の？
裏を見た。

津山市・・・町

清水真由美

津山市！？

コレって・・・アレだよね・・・絶対！！

次の時点では私、何の戸惑いもなく

中身取り出してた。

もちろん、手紙を。

『かずや 今日があると。

会ったばかりなのに、もうかずやに会いたいよ・・・。

早く来週の日曜日こないかなあ！！。

あのね、かずや！！

私のカバンにつけてたパンダのマスコットあるでしょ！？

あれをね、かずやにも作ってあげたいなって思ってるの・・・。

それでね、ほかにタヌキとイヌもあるんだけど

どれがいい？

一緒に写真入れとくから選んで！！
返事教えてね。』

一通目はそんな感じで・・・。

なんだかぬるい顔したマスコットが三体並んだ写真が同封されてて
思わず苦笑。

続いて二通目。

『かずや・・・中間試験はどうやら散々みたいで〜す。

かずやのことばっか考えてたせいか、ほとんど勉強なんかしてない
わけで。

なあ〜んて言ったらかずやに怒られちゃうかも。

あのね、かずや・・・一つ聞きたいことがあるの。

聞きたいとゆ〜か私自身がすごい気になってることで・・・

あのね・・・夜、かずやに電話しても全然出てくれないよね・・・。

お仕事が忙しいのかなとは思っただけど。

時間変えても全くかずやと話せないから

ちよつとさびしいなあ。』

（中間試験！？高校生！？）

続いて三通目。

その手紙からなんだか雲行きは異様に怪しくなりはじめた。

『かずや！今日かずやと電話で話して、電話を切ってから

私はメチャクチャ腹が立ってきました。

かずや！！私が卒業して、かずやと一緒に暮らせるようになったら

絶対！！私がそのかずやのツレだった人を探し出してあげる。

かずやをだましてお金を持ち逃げしたその人のこと私は絶対に
許さないから。

かずやはもういいなんてゆったけど、そんなの絶対ダメだよ。だから私が絶対に見つけてみせるから。それで、お金も絶対取り戻してあげるからね。』

（お金！？持ち逃げ！？

一体・・・何！？）

もつと詳しく知リたかったのだけど、続きの内容のものは出てこなかった。

その代わり、この二人の結末が残りの手紙には書かれてた。

『今日、私のお父さん宛に藤川美佐さんと言う女の人から手紙が送られてきました。中には写真が何枚が入っていました。その写真を見た

親はどちらもすごいショックを受けています。

かずや、私はショックで悲しくてボロボロだよ・・・。

泣きながら今書いてて、字もうまく書けない。

かずやにずっとだまされてたんだね！！私は。

最近は夜も電話に出てくれてて、

『今、ベッドに入ってかけてるよ』なんて

かずやは笑いながら言ってたけど、そのベッドは

美佐さんの部屋のベッドだったんだね。

かずや！！私のことだまして楽しかった？

私はほんとにかずやのこと大好きだったのに・・・。

今日の今日までほんとに何も知らなかった私が

メチャ馬鹿に思える。

かずやを好きだった自分が情けないよ。

二度と顔も見たくない。

さよなら。

真由美

』

字がところどころ滲んできた。

涙の跡なんだろう・・・沢山付いてた。

客観的にみても、有りがちっちゃ有りがちなパターンだよな。

二股かけられてたなんてのは。

ただ藤川美佐がこの子の父親宛に

手紙を送ってるのが不気味。

しかも写真つき！？

そして最後の一通。

『お願いです。

もう美佐さんに家に電話してこないように
言ってください。

もう私はあなた達とは関係ないですし

本当に迷惑してます。

これ以上かかわられたら親が

警察に相談するといってます。』

（散々だね・・・。）

その最後の手紙の下から、例のパンダのマスコットと

ポケットアルバムが二冊出てきた。

ポンポンで出来たパンダは可哀相に、押しつぶされて

変形しながらもぬるい愛嬌を変わず振りまいていた。

次にアルバムの一冊目を開いてみたものの何も入ってなかった。

そして二冊目を開いてみたら・・・4枚だけ写真が入っていた。

川原の大きな岩の上で、かずやと制服姿の真由美ちゃんらしき

子が二人で写ってる写真だった。

かずやは今より少し太っててなんか印象が違う。

真由美ちゃんは目が細くて細身の子。

4枚とも全く笑ってなくて、場所が場所だからかなんかいまいち殺風景な写真だった。

この写真送りつけたのかなあ。

コレだと、さほどシヨックはないはずだろうけど。

次に白い便箋らしきものがきちんと二つに折りたたまれて少し大きめの茶封筒と一緒に並べて入れてあった。

箱の中はもうそれだけみたいだった。

何気なく茶封筒の差出人を見た私は思わず凍りついた。

かずやの影

岡山家庭裁判所！？

なんで！？・・・なんでこんなところから？・・・

宛先は、ここの住所で、間違いなくかずやに送付されたものだつた。
真由美ちゃんの手紙はさつさと見てしまった私だったのに

この、お硬い茶封筒の中身を見るのはなんだかものすごく怖くなつてきた。

それで先に、折りたたんである白い紙を開いてみた。

『借用書』

借入金額　金五拾萬円也

上記の金額確かに借用しました。

ついては・・・・・・・・・・

平成・・・年・月・日

貸主　宮元　学

借主　沢本　かずや

鳥肌たつた。

宮元って！？・・・写真館の・・・

社長だよね・・・多分。

お金といたら一瞬

真由美ちゃんの手紙に書かれてた

持ち逃げつてのが浮かんただけど

全く関係ないわけだよね・・・。

だつて貸してんじゃなくて
借りてんだもん・・・。

なんで?!なんで借りてんの・・・。
社長もなんで!?どうして貸したわけ・・・。

頭の中パニック!!!

でもまだこの封筒が・・・。

またキリキリと胃のあたりが痛み始めた。

そして心臓のバクバクするのを感じつつ、茶封筒の中の書類を取り
出して開いた。

・・・妻、藤川美佐から慰謝料の調停・・・つつ!!妻あ!?
かずや、結婚してたの!?・・・訳わかんない!!!

もう何もかもさっぱり訳がわかんなかった。

無性に怖くなった。

怖くて怖くて・・・突然私の体はガタガタ震えだした。

どしたらいい??

それからしばらく、動揺どころかパニックって感情が高ぶりすぎて
自分をなんとか落ち着かせようと必死で・・・。

しばらく自分が何やってたのかはよく覚えてない。

外が暗いのに気づいてハッと思い、時計を見たら
もう6時近く・・・ウソでしょ!!?

かずやがいつ帰ってきてもおかしくない時間だった。

私は急いで書類をしまい手紙をかき集めて箱に戻した。

こうなつた以上・・・かずやと話すしかない!!

私は箱を持ってきてコタツの中に入れ込んだ。

体の震えは止まらない。

なんともいえない緊張感と

不安に襲われながら

私はかずやの帰りを待っていた。

終わりの線

ボタンと音がした。

とつさに、私はコタツの天板に突っ伏した。
階段を駆けあがってくんのを待ち構えて

『おっかえりい！！！！』

『たっだいまあ！！！！』

つて、やってたのは幻……。

かずやもそんな空気をよんだのか黙って
静かに部屋に入ってきた。

私は気配を感じつつも、身じろぎ一つしないでした。

『……あや……寝とん？』

もちろん返事する気なんて全く無し……。

『あや……なあ……』

かずやが私の肩をゆすった。

それでもシカト。

『……ほんなここ入れてえ！！』

私を軽く押しのけて隣に入ろうとするかずやに

『ここっ！！無理っ！！』

即、手で遮った。

『やっぱ起きとんでえ……』

あや……今日マジでごめんよ！！……』

『……』

『なあ、怒つとんだろ？……』

ほんまマジ悪かった！！』

かずやは後ろからガシツて、いきなり抱きしめた。

『やめて……』

『機嫌なおしてだ……。なあ、あや、たのむわ……』

俺、ちゃんと社長に』

『・・・・・・・・それはもういい!!』

『・・・・。いいて?・・・・なんでえ?』

『いいからいいの!!それよか聞きたいことがあんの!!
そっちに座って!!』

『・・・・。ようわからんけどお・・・・。』

でも・・・・座るんはここな!!(笑)』

ふざけて座ったかずやは、何かに当たったから

『あれっ!?!・・・・何これ!?!』

つてコタツがけをめくろうとした。

と同時に私が手を伸ばして

箱を取るとコタツの上に置いた。

『・・・・・・・・。』

一瞬かずやはあっけに取られたような顔をした。

それと同時に笑顔も消えた。

かずやは箱のフタをちよつとだけ持ち上げて

すぐ閉じた。

『見てもうたん・・・・。』

『・・・・・・・・・・・・。』

『いつかは言わなあかなとは・・・・思いよつたんけどな・・・・。』

『じゃ!!今日がその時ってことよな!!』

私の言い方はトゲトゲしかった。

『・・・・・・・・・・・・。』

しばらく沈黙が続いた。

肘ついたまま、かずやはしばらく考え込んでるみたいだった。

でも思い切ったように話し出した。

『あんなあ・・・・。俺・・・・。』

大学二年の時に、彼女が出来てな・・・・。

ごっつい好きやったんよ。メツチャ好きやってな・・・・。

やのに、突然俺・・・・ふられてもうてさ。

何の前触れもなく、急に別れようって言われて・・・・。

納得いかんかった。

メツチャ落ち込んだしな。

そんな時からツーショットに、はまりだしたんよ。でも・・・なかなかえーことなんかなかったな。

そんな時にバイト先のヤツが紹介したるわってしてくれたんが美佐やったんよ。

正直いうて好きとかそんな気持ちは全然なかったんけどな。

向こうが好きっていうし、ま、ええか・・・みたいな感じで

最初付き合い始めたんけどな・・・。

・・・あや、イケルか？」

『うん。大丈夫。』

『そんな時、美佐は短大いつきよって、一人暮らししよったんけど・・・。

遊びに行くうちに、だんだんと俺、美佐んところにおるようになったんよ。

ほとんど自分の部屋には帰らんようになった。

そんなんしよたら、突然美佐が短大やめてもってさ・・・。

アイツ・・・夜、仕事に行くようになったんよ。

最初の頃はどんなとこいつきょんか俺には言わんかったんけど。

でも、すぐ、風俗いっとなるのがわかった。

そのうち俺な・・・

朝、アイツが帰ってきたら

アイツのサイフから稼いできた金抜くようになったんよ。

それで一日遊びまわって・・・

美佐はわかつとったんやろうけど・・・なんもいわんかった。

俺それええことに、バイト行かんようになったし。

大学も行かんようになった。

美佐と暮らすんは、楽やったけどアイツに対しては気持ちが悪くメツチャ冷めとったな・・・。

あからさまに態度に出しとったけん、美佐と喧嘩もしよっちゅうや

つたし。

あいかわらずツーショットにはずっとはまりまくって
伝言で、真由美とうまいことイケたけん。

ほんで真由美とも付き合いだしたんよ……。』

それからまたしばらく、かずやはだまりこんだ。

『ちよつと聞いてもいい？』

私のほうから今度は切り出した。

『お金持ち逃げされたってのはどういうこと？』

『……。それは……。大学のときの仲良かったツレが

ほんまに困つとうけん、金貸してくれって頼んできてな

俺、貸してしもつてさ。それで次、そいつのとこ行ったら

もぬけの殻やつてさ……。』

『かずや、貸す金なんかあつたん？』

『……。いや……。借りた。』

『それが借用書の？』

『あ、ちゃうんよ……。それでなくて……。』

『は！？……。借用書以外にも借金あるってこと！？』

『……。……。ある。』

『もつ！！最低！！』

私は言い捨てた。

『あや、そんな言い方すんなだ。たのむけんさ……。』

『……。じゃ、借用書のは？』

『それからあとな、

俺は、家賃払うのがめんどくさあなつてきて……。』

自分の借りてたところは引き払って美佐とマジで

同棲つてなった。

真由美の手紙を美佐が見つけて

アイツ、そのときは俺にはなんもいわんと

そのあと、誰かに頼んで俺のこと付けさして

真由美とラブホ行ったりしとんとか

写真に撮ったりまでしとったしな・・・。

そのことから

大喧嘩になった。』

『じゃあ、その写真を送りつけたんだ、相手に？』

『うん。そうそう・・・。』

それで俺は住み込みの仕事を見つけて

美佐んところから出て

ここに住みだした。

しばらくしたら裁判所から書類がきて・・・。

美佐が勤めとった風俗の経営者かなんかに

俺のこというたらしんよ。

法に詳しいやつがおったんだろな。

俺と美佐は同棲しとるうちに、内縁関係が成立しとるけん、

慰謝料の請求が出来るって教えられたらしい。

それで調停に持ち込まれてしもうてさ。

俺そんないきなり来てメツチャ焦ったし。

どないしたらえんか訳わからんなって

社長に相談した。

何回か裁判所に行って・・・

俺のほうも写真撮られたこととかは

いうたりはしたんけどな・・・。

最後は俺が美佐に慰謝料を払うってことで

社長が慰謝料立て替えてくれて

とりあえず裁判所のこととは終わった。』

『じゃ、借入書のが慰謝料ってこと？』

『うん。』

しばらくお互い黙り込んでしまった。

かずやも話すべきことは、話し終わってたんだろっ。

私の出方を待ってる、そんな風に思えた。

ある程度、状況はわかった。

やっぱりこんな時、自然と人って
深い深いため息ばかりついちゃうんだね・・・。
そして私はため息混じりに言った。
『うちら、ここまでにしとこ・・・』
』

別人

『どっちみちだよ、かずや。』

これ以上、一緒には無理・・・。

私、ここにいることさえ出来ないんだもん!!
とにかく早く出てかなきゃ!!』

『あやがここ出るんなら俺も一緒に出るわ!!
な?そうしょ!!』

『私は一人で大丈夫!!心配せんで!!』

『そんなんいうなだ!!二人でおったら何でもイケルって!!』
『・・・・・・・・。。』

そのかずやの言葉が、私の心の抑制を一瞬で壊してしまった。

『なに言ってるの!?

何でもイケルって・・・何がどおイケルわけ!?

今の時点で何一つイケてない!!

イケてるどころか次から次に問題だらけで・・・。

その上、金銭的にも最悪!!

私には、やんなきやいけないことが山ほどあるってのに
その上に問題まで山積みで・・・。

やれるわけない!!

やれる自信全くない!!

それなのに・・・。

無責任なこというのもええかげんしてよ!!』

泣くのをこらえながら、一気に吐き捨てた。

『・・・・・・・・。。』

俺が邪魔になっただろ?・・・。

『どおとつても、構わんけど。』

『そうなんやな・・・わかった。』

スクツとかずやは立ち上がると

部屋のドアを乱暴に開けて出て行った。
でも階段を駆け降りる様子はなかった。
バタバタとかずやは戻ってきた。

信じられなかった・・・。

（私、刺されるんだ！！！！）

かずやの手に握り締められた包丁を見たとき
とっさにそう思った。

かずやはボー然としていた。

いつものかずやの目つきじゃなかった。

前の時と同じ目つきになってた。

すぐグサリとやられるかと思ったのに・・・。

立ち尽くすかずやに、私は釘付けになり

恐怖のあまり声も出せない。

体はガタガタ振るえ、涙がボロボロとこぼれだしていた。

かずやはゆっくり歩き出して私の前にしゃがみこむと

突然、片手で私の首をつかみ、乱暴に押し倒した。

声にもならない、うめき声を上げた私に

かずやは馬乗りになると、もう片方の手で

グサリと包丁を突き立てた。

私の右顔の真横、豊に真っ直ぐ突き刺さった包丁が目に入った。

声も出なかった。ただただ恐怖としか・・・。

『あや・・・お前何いよんかわかってないんだろ・・・。

俺が邪魔っていうんやけん。

勝手に俺の子供を殺すつもりなんやな・・・。

そんなん許されると思うとん・・・。

許すわけないだろが！！！！』

そいうと、かずやはさらに強く私の

喉元をグイグイと押さえ込んだ。

苦しい！！苦しいんだけど・・・。

フワッと意識がどこかにいくような軽い不思議な感覚が・・・。

かずやが手をゆるめた。

馬乗りになったまま、またいつかのような目で私を見下ろしていた。

『出て行くんなら、子供を置いていけ。』

今すぐコレで、お前の腹切って俺に子供を渡せ!!

出て行くんならお前だけ出て行け!!』

『こ、子供・・・?』

『やっぱりわかってないな!!』

お前の腹ん中に俺の子供があるかもしれんに

何いうとんなお前は!!』

『・・・。。。。』

ようやく意味が飲み込めた。

この前の・・・。

『そ、それは心配ない。出来てない・・・。』

私は震えながらもすがるような思いで、かずやにいった。

『生理きたんか!!』

『きてないけど・・・で、でも・・・出来てない・・・』

『ほんなら、わからんだろ!!』

適当なこというなだ・・・。』

軽蔑するように、かずやはいった。

『・・・もし・・・出来たら死にたい。』

こんな状況で子供なんて・・・死んだほうがまし!!』

私は恐怖と不安と・・・あらゆるものが湧き出して

泣いてしまった。

かずやは、乱暴に私の腕を引っ張り上げ

私を起こすと

『ほんなら望みどおりしたるわ!!』

立て!!

これから車までいくぞ!!

俺とお前と子供と一瞬であの世じゃわ!!』

そついいながら、立ち上がれない私を

容赦なく、かずやは引きずり出そうとしていた。

『やだ！！！やめて！！！！』

泣き喚きながら、私も必死でかずやの腕を引き寄せていた。

『お前がいうたんだろが！！！！』

そっぴいながら、かずやは私を払いのけた。

突き刺していた包丁に向かうと

畳から引っこ抜き、包丁は私目がけて……。

思わず、私は右腕で自分の顔を遮った。

ジクつと痛みが走った。

見る見る右腕裏から線になって血があふれ出してくると

ポタポタと畳に鮮やかな血が滴り落ちた。

『……え？』

私は力が急に抜けてしまい、右腕をかばうように

へなへなとかがみこんだ。

『あや！！あやっ！！ごめん！！……どないしよう！！俺……』

あや！！あや！！あゝ！！！！俺……』

うるたえたかずやは頭を抱え込んでしゃがみこんだけど、

ハッと気がついて私を抱きしめると

『ちよつと待つといて！！な！？』

私の返事も聞かず、階段を駆け降りていった。

私は恐る恐る、右腕を見てみた。

大した傷口ではなさそうだった。

力がかかる部分のため、血がやたらににじみ出たようだ。

ティッシュでぬぐうと、さらに大したことなく、かすり傷程度に見

えた。

階段を駆け上がって来たかずやは、持ってきた救急箱を開けた。

大家さんのらしい。

『もう大丈夫……。』

『あかんで！！あや……見して！！』

そっぴいとうと、かずやは、大したことない傷口を

相当時間かけて手当てしたあげく、包帯まで巻いた。

その間、ずっとかずやを見てた。

さっきまでのかずやと、今のかずや。

まるで別人のようだ。

『出来たで。あや……。』

『ありがと。でも、大げさすぎだよ（笑）』

かずやは私を抱きしめた。

『あや！！ごめんな！！ほんとにごめん！！』

二度とこんななんて誓うけん！！

別れるとかそんな言わんとして！！頼むけんさ……。』

そっぴいながらかずやは泣き出してしまった。

返事は出来なかった。

だけど、

『そろそろご飯食べない？』

って言ったら、

かずやはたちまち元気になって

いつもより、さらに優しく接してくれた。

『それが、DV典型の症状だよ。

暴力の後はウソのように優しくなる。

もうしないといっても、またやってしまうんだ。

治っちゃいない。

簡単に治るようなもんじゃないんだからね。』

その頃はまだDVなんて言葉が世間に浸透してなかった。

DVも専門としている先生とそんな話をしたのは、

まだはるか未来のことだったんだ。

母の手

なかなか寝付けない夜だった。

かずやが包丁を持ち出してきたこと・・・。

それは私にとって > ショック < 程度の言葉で表現出来るほど生易しいものじゃなかった。

車のことにしたって、あの時のかずやは、本気としか思えなかった。私の頭の中でまざまざと今日のことが蘇ってくる。

（ほんととは・・・殺されてたかもしれない！！）

なんとも例えようのない不安と恐怖のなかで

それでも、なんとかここを出るための方法を考えていた。

朝、六時過ぎには起きて、まだグッスリと寝ている

かずやを起こさないよう静かに着替えを済ませた。

七時前に家を出てコンビニへ向かった。

久しぶりにコンビニの前の公衆電話の受話器をとった。

すこぶる緊張はしていたけど時間が限られている。

モタモタしてはいられなかった。

私は電話をかけた。

『はい、もしもし片山です。』

・・・もしもし?・・・』

電話に出る相手が誰か、もちろん見当はつけていたものの、その通りであってくれたことに、すごくホッとした。

『あ、あの・・・。私・・・。』

『・・・もしもし!?・・・あやなん!?』

『うん・・・。ゴメン・・・私・・・。』

その途端、はあゝと大きなため息が聞こえた。

『・・・まったくアンタはっ!!!』

ウンともスンともいわんと・・・

こっちは生きとんか死んだるんかもわからんで心配しよんのにから

あゝ。

どうしょったん？ほんまにい！！！！

・・・元気でおるん？」

久しぶりに聞く母の声だった。

そして変わらずいつもの調子・・・。

『うん。まあ・・・元気・・・。』

お母ちゃんらは変わりなし？」

『変わりなしって・・・！？』

・・・まあ、こっちは皆元気じゃ。

シユンもカヨも元気におるで！！

最近なあ、しおりちゃんも一緒に住みだしたんよ。

いきなし大きなトラックが家の前に来て、なんかと思うたらピアノじゃったんよ。

こっちはびつくりしたがあ・・・じゃけえど、おえんともいえんし・・・。

しおりちゃんは上の弟、徹の彼女で、その頃、音大の学生だった。

弟は家業を継ぐ予定で実家にいた為、しおりちゃんは休みの度に

泊まりにきては家の仕事を手伝ったりしていたのだけ。

『そうなんじゃあ・・・。』

『アンタはアンタで・・・。』

いまさらこんなことになるとは・・・

正直、思いもよらんかったわ・・・。

じゃけえどそんななんいうてもなあ。

今更こうなったもんは仕方ねえけどもなあ・・・。

『・・・ほんとに・・・ごめん・・・。』

子供らは？」

『今朝はまだ寝とる。』

シユンは毎日アンタのことをいうよ！！

何しようてもじゃあ・・・。

お母さんはこうゆゝたとか、こんなしてくれたとかなあ。

お母さんがキティのおにぎりをしてくれたんじゃあって
この前シュンがしおりちゃんに話をしてな。

その後しおりちゃんが一生懸命作ってくれたんよお。
二人とも喜んで食べてなあ。

シュンは食が細えけえ、ちよつと心配じゃけえど

カヨはなあ（笑）・・・。

ほんまによう食べるし、よう喋るし・・・。

私のことを『母ちゃん!!』って呼ぶん。

お父ちゃんと徹がそう呼ぶけんじやろう。

真似しだしてなあ・・・。

『違うんでえ!!おばあちゃんじゃ。』

っていうても、聞かん（笑）。

起きてきたら最後、片時も離れんについてまわるんよ・・・。

状況が手に取るようにわかる。

子供達の様子、母の表情まで、言葉が映像になって

出てきたかのように思い浮かんだ。

自然と涙がボロボロとこぼれ落ちた。

『アンタも・・・子供らには会いたかろうにと思うわ・・・。』

『うん。それは・・・。』

ほんまに・・・』

こみ上げてくるのを、抑えるのが精一杯。

『ヒロちゃんとは?・・・』

『神野のお母さんと話して、そのあたりからは全くなんにもない。』

『・・・。。』

こっちには2、3日おきにヒロちゃん電話してくる。

私らに用はねえんじやろうけど・・・。

シュンと話するんになあ。

じゃけえど、そのたんびに、あやには絶対会わせんといてくれ!!

って言うてくるわ。

ヒロちゃんもヒロちゃんじゃ!!

私も、アンタのこと思ったら一言ゆつてやろつかとも思っんじやけど……。

代わりに……シユンがなあ……。

『お父さん、お母さんと仲直りした？お母さんを迎えにいつてきて！！』

つていうて……。

それ聞きたんびに私は……。

母もグツと……こらえてるようだった。

『シユンがしっかりしとる分、アンタと会わせてしもつたら、そんなこんなで

すぐヒロちゃんにわかるじやろっし……。

そんな時ヒロちゃんがどお出てくるかはわからんけど……。

今はアンタら二人のことに、うちらが波風立てんようにせにゃあいけんなあと思よんよ。

暇な時は、徹としおりちゃんが、子供二人連れて、どこやかしこ遊びに連れ出してくれようる。

子供らも喜んで、なついてなあ。

まあ、内心、しおりちゃんがおってくれて私も助かつとるようなもんじや。

ぼちぼち仕事も入って忙しいときもあるけえ……。

アンタは？……どうしょん？

そのお……

今……男の人と一緒にいるんじやろ？』

『うん。……』

『どうするつもりなん？』

『今は……とにかく仕事見つける。神野のお母さんにもそういうたし……』

『……』

まあ、元気であるんならえんじやけど……。
たまには連絡しておいでえよ。

どうしょんかぐらいは報告するようになあ。

お父ちゃんもアンタのことじゃあ頭に血がのぼつとるようなけん今はどうにもならんけえど・・・。

内心、心配はしうるでえ！！

娘じゃもの・・・。

・・・。

話は尽きんけえど、そろそろお父ちゃんと徹が帰る時間じゃ。

またこの時間ぐらいにいつでも電話しといでえ！！

待ちようるけえ。』

『・・・お母ちゃん！！・・・』

『ん・・・。どしたん？・・・。』

『あんなあ・・・。お金・・・貸してくれん？』

『金え？・・・。』

『うん・・・。ほんとにわりんけど何とか出来ん？』

母はまた大きなため息をつく

『アンタ、貸してってゆうても返せるん？（笑）』

『・・・。。』

『何ぼお位、いるんで？』

『・・・2、20万・・・いや、ううん・・・。』

ほんとはもうちよつと・・・あるほうが助かるんけど・・・。』

『別に・・・アンタに返してもらうんはアテにはしとらん（笑）』

じゃけえど、母ちゃんもちよつと郵便局行ったりしてみにやあ。

今すぐ、どれほど貸せるともいえんし・・・。

じゃけえど、どうすりやあえん？

その金をアンタに渡すんは？』

『私の銀行の口座に入れてほしいんよ。』

『わたしやあ、そういうんがようわからんのんじゃけえど・・・。』

とにかく！！明日の朝また電話しといでえ。

今日、母ちゃん、金のことは何とかしてみるけん。

ほんならあ切るけえな？』

『お母ちゃん・・・ほんとに有難う・・・
ほんとにごめんな・・・』

『まあ、今日も元気出して!!』

無事にやりんさいよ!! (笑)』

母は私に喝を入れるかのように

大きな声でそういうと

電話を切った。

ホッとして泣けてしまうのだろうか・・・。

嬉しすぎて泣けてしまうのだろうか・・・。

とにかく沢山沢山何かがこみ上げてきた。

受話器を握り締めたまま

泣きながら立ち尽くしている私の顔は

相当ヒドかったに違いない。

朝の通勤でドンドン増えてく人の往来のなかに

もちろん奇異な視線があることは感じていたけど。

一向にそんなこと、

そんな時は、かまやしなかったんだ。

つかの間の二人

家の前でイライラしながら待つかずや．．．びっくりしたのは．．．

隣に、大家さんまで立っていたことだ。
それを見て一瞬

（どうしようか！？）

とうろたえた私だったけど、この泣きつ面で
下手なウソをついても意味がないと思った。

私を見つけて、駆け寄ってきたかずやは

『あや！！こんな朝っぱらからどこいっとなん！！
マジ心配やったんぞ！！』

って私を叱った。

『ごめん．．．。ほんまに早くに目が覚めて．．．。
この時間なら、お母ちゃんと話が出来ると思うて
家に電話しに出とったんよ．．．。』

『ほんなん、部屋からせーだあ！！
なんでわざわざ出とんな！？』

『かずやグッスリだったし．．．
起こすんも悪いと思うて．．．。』

ごめん．．．。

ほんとにごめんなさい。』

はあーっと、かずやはため息をついて

『まあ、ええわ。

とにかく仕事いつてくる。

大家さんも心配しとったんやけんな．．．。』

『ごめん。謝つとくわ．．．。』

かずやは急いで自転車にまたがると
大家さんに

『いつてきます!!』

といつて出かけていった。

大家さんは私を見てニツコリ笑いながら

『お兄ちゃん、かなり心配しようたわ。』

つて言った。

『すみません。』

大家さんにまでご心配かけたみたいで……。

『私は全然かまやせんよ。気にせられんと。』

それより、ここのこと悪かったなあと思うてな……。

私も知らんかって、つい奥さんに話したばかりになあ。

お姉ちゃん、ゴメンよお……。

『あの……その件はほんとに私のほうこそ、すみませんでした!!』

大家さんが私を、ここに住めるように頼んで下さったこと、

奥さんから聞きました。

ほんとに申し訳なくて……。

感謝してます!!』

『感謝やこうえんよ……。』

ただ……お姉ちゃんどうするんかと思うてなあ……。

それが私は心配じゃ……。』

『大丈夫です!!何とかなりそうですから(笑)』

『そんなら……えんじゃけど……。』

お姉ちゃん、がんばつてえよ!!』

大家さんはそう言つと、家に入つていった。

母と話せたことで、私は俄然、元氣になれたような気がした。

急にやる気も沸いてきて、目をつけていた求人先に電話してみようかと

いう気になった。

再び求人誌を沢山買い込んで来て、悠長に選り好みしてるような場合では無いような気もしていたし。

で、早速電話をかけてみた。

出てきたのは女性だった。

訪ねてみると

『実は明日面接を行う予定でいるのですが、
ご都合いかがでしょうか？』

と聞かれた。

『大丈夫です！！』

即答した。

『それでは明日の13時に履歴書をお持ちいただいて
こちらの店舗までお越しください。場所わかりますかね？

。。デパートの裏側の通りになるのですが。。。』

『はい！！多分大丈夫だと。。。』

『もし、わからないようでしたら遠慮なくお電話ください。
それでは明日お待ちしております。』

『よろしく願いいたします。』

電話を切ってホッとしたと同時にラッキー！！！。

明日！！面接だあ！！

早速別の部屋に行き

かけてある服の中から

かつちり目のスーツを出して

インナーに合わせるシャツを物色し始めた。

自分なりにコーディネートを完成させると

次は履歴書の作成をした。

履歴書を書きながら、

もおかなりのブランクが生じてしまった自分の職歴に愕然。。。。

採用なんて。。。

望みは無い気がした。

だけど、

（挑戦することに意味がある！！！！）

ばかばかしい（笑）

そう思いながらも、私は再び奮起したのだった。

その日の夕方、部屋の電話が鳴った。

毎度毎度どつきりしてしまう。

恐る恐る受話器を取り、

『……もしもし?』

『……あや!! 俺え（笑）

びびったやる!?!』

かずやだった。

話振りからして悪いことではなさそうだ。

『べつつにい（笑）どしたん? かずや……』

『あんな、今日奥さんが仕事終わったら買い物行こうってゆんよ。

俺に靴な、こうてくれるらしんよ。なんか見かねたらしゅってさ・

・。

『……』

その気持ちわかる（笑）。やばいもん!!!』

『やつぱ……（笑）。ほんで、ちょっと遅いかもわからんけん。』

『わかったあ。』

帰ってきたかずやは、真新しいスニーカーだけがやたら目立っていた。

自分でもシツクリ来ないのか、恥ずかしそうにしているかずやを見ると思わず噴出してしまった。

『なんか、足元、かずやじゃないんですけど……（笑）』

『だろ!! だろ!! 俺もそう思うわ（笑）。』

その後、食事しながら明日の面接のことも話した。

なんだかまた私達に楽しい時間が戻ってきたかのようだった。

だけど、それはほんのつかの間のことで……。

手のひらの幸運 1

次の朝も、母に電話をかける為、早く起きたのだけど何となく体がだるく、目覚めもスツキリしない感じだった。下腹あたりに鈍い痛みを感じて、トイレに立った。

来るべきものが来たことを確認した私は、さっきまでの体の不快症状なんてたちまち吹っ飛んでしまった。

『よかったあゝ!!!』

思わず声に出して言った。

さほど気にかけて心配はしてないはずだったのに・・・ほんとのほんとに心底安心して自分がそこにはいた。

部屋に戻ったら、突然かずやがムクツて起きて私を見たからドキッ!!とした。

だけど、またそのままバタリと寝てしまった。

『かずや・・・ちよつといるものあるからコンビニ行くね。すぐ帰ってくるから・・・ね?。』

かずやをゆすると

『・・・わかった・・・。』

かずやは眠そうにそういうと寝返りして

『帰ってきたら起こして・・・。』

っていった。

かずやのいるところで母に電話をかけたくなかった。

昨日も・・・そして今日もだった。

昨日の私は、母と話すため気兼ねなく話せる環境が欲しかった。

今日ももちろん、そうであることに変わりは無かったけどそれ以上に、母が用立ててくれるお金のことをかずやに知られることが嫌だったんだ。

明らかにこの時、私の中で

かずやとかずやを取り巻いてるこの環境から

逃げ去ることが出来る大きなチャンスだと思い始めていたから。母に電話をかけ、私名義の銀行の口座番号を伝えた。

『それじゃあ、午前中にはここへ入れとくわなあ……。』

お昼にでも、ちゃんと入ったかどうか見とくようになあ。

まあ、アンタの納得のいく金額かわからんけどあ……。

お母ちゃんもお父ちゃんに言わんとすることじゃけえ、

この程度しか出来んけ（笑）……。』

『うっん、ほんとにお母ちゃんありがとう！！ごめんな……』

ほんとにごめん……。』

『そがあなこと、別にええ……。』

『今日な、私、お昼過ぎから面接なんよ。』

どうなるかわからんけどお、とにかく行ってみるわ……。』

『そりゃあ頑張らんなあ！！』

ええ事になるように、母ちゃん

ホトケさん拜んどくわなあ（笑）』

『うん！！たのむな（笑）』

『そりゃそうと……。』

アンタと連絡取れりやあええんじゃけえど……。

考えてみりゃあ、おばあちゃんも、ここんどこだいぶ弱ってきたし。

ほんとに、いつ、なにがあるかもわからんじやろつ。

いざって時に連絡が取れんのはちよつとなあ……。』

それで、母に家の電話番号を伝えた。

安心してくれたみたいだったから嬉しかった。

『こっちからは、めったなことが起こらん限りは

かけんけえ……。普段はアンタからかけてくるようになあ。』

そうして、母との電話を切った。

コンビニで適当にいろいろ買って、急いで家に帰ると

かずやを起こした。

かずやを送り出してから、洗濯と掃除をした。

それが終わる頃には、もう時計は11時を指していた。
お化粧してスーツに着替えると、やっと実感が湧いてきた感じ……。

でも正直やっぱ窮屈。

こうして部屋に座り込んでても

スーツにシワが寄っちゃうだけだ。

ATMに行く予定もあるし、早めに出かけることにした。
庭には大家さんが出ていた。

私に気づくなり

『こりやあまあ……びつくりじゃ!!』

誰がおるんかと思うたわ……。

お姉ちゃん、仕事行くん?!』

『いいえ。今日面接なんです(笑)』

『そうかそうか!!』

大家さんは門扉を開けながら

『お姉ちゃんなら大丈夫じゃ!!』

頑張っ行っておいでえよ!!』

そういつて送り出してくれた。

ちよつと早いかなとも思っただけど

ATMに行き、通帳を入れた。

戻ってきた通帳には

30万が入っていた。

でも、その横に記されていたのは

母の名前ではなかった。

片山 徹

弟の名前だった。

母がATMの操作が苦手なことはよく知っていた。

だから、弟に頼んでくれたのだろうとあっさり納得ができた。

そして、私は素直に

母と弟に

ありがとう・・・
そう心から思ったのだった。

手のひらの幸運 2

求人誌の小さな地図だけで、難無く来ることが出来た。
その店の前に着いたのは面接時間の10分前だった。

なのに、店の中は暗くて誰もいない。

どうみても休みの様子だった。

そのまま店のドアの前でしばらく立ちつくしていたものの・・・。
とりあえずドアをガチャガチャやってもみたけど、
勿論閉まっていた。

時計を見たら、もう少しで面接時間の13時だ。

（ウソでしょー！？もしかして間違えたあ！？）

店の正面に出て、慌ててまた小さい地図を開いた。

求人誌の切り抜きを見ても会社名だけしか掲載されてないみたい。

この店の名前は・・・。

店のガラスに白い文字で書かれたロゴを見てかたまった。

COMME des

店の名前じゃない！！これ・・・ブランドだ。

どっかで聞いたことある、見たことある。

オートクチュール！？・・・パリコレあたり！？

（やばっ！！間違えてるうー）

泣きたくなった。

その時、私の背中側から

『いやあ！！ごめんねー！！ほんとにい。』

って男性の大きな声が聞こえて、思わず振り返った。

そしたらマウンテンバイクにそれぞれ乗った男性と女性が
私の方に走って来た。

『面接だつてのに、面接官が遅刻なんて最低だよな。
いやあ、申し訳ない！！』

そっいいながら、二人はマウンテンバイクから降りると

急いで、それを店と隣のビルの間に駐車した。

私はただ啞然と眺めていた。

女性は私を見るとニコリと笑って軽く会釈した。
慌てて私も。

全身、黒でまとめた服装。

髪はかわいくアップにしててすごくかつこ良かった。

『こっちのビルの中でしますからあ。どうぞ!!』

男性にそういわれ、隣のビルの入り口に行くと

そこに、女の子が一人立っていた。

『あつ!! 貴方がもう一人の方だね!! ほんとにお待たせして・・・』

今日は、うちの服で来てくれたんだねえ!! ありがとう!!

それにしてもすごい上手に着こなしてくれてるね。』

その子は多分20歳前後だったと思う。

女性と同じく、全身黒っぽい服装のコーディネートは

ほんとにおしゃれでセンスの良さをうかがわせた。

その時点で私はもう白旗を掲げた。

どうやら面接の場所に間違いはなかったらしいんだけど

会社の選択を確実に間違えてしまった。

『それでは、こちらの方から行きます。

貴方はしばらく、ここでお待ちくださいね。』

女性がイスを持ってきてくれた。

座ってしばらく、もう緊張もドキドキもしてない私だった。

この私の服装自体、不採用決定確定。

そのとおり!! とばかりに、待ち時間も大して無かった。

そりゃそうだよな。

『どうぞ!!』

って声がしたので私は入っていった。

比較的大きなテーブルが置いてあった。

促された席に会釈して座った。

男性は名刺を差し出して挨拶すると、再度申し訳なさそうに時間のことを謝ってきた。

履歴書を渡すと社長は早速広げて一通り目を通した。

『うちを選んで下さったのはどしてかなあ？』

私は、自分の今の状況を話した。

勿論かずやとの同居以外のことだけ。

なので、なるべく早急に仕事を見つけないこと、

職種が自分にあって通勤が便利と思ったことなどを話した。

『うちの扱ってるブランドは知ってる？』

多少知ってるけど、今日来てビックリしたって素直に言った。

だってデザイナーが誰かも知らない。

社長は私に、別のブランドもいくつか

デパートに展開しているんだと説明した。

そこに派遣して働いてもらう予定だと。

社長は私に質問こそしなかったけど、

それぞれのブランドのコンセプトがどうか

すごく熱く語ってくれたわけで・・・。

でも聞いてて全然窮屈な気がしなかった。

社長はすごくオシャレなうえに

何となく気高そうな印象にも見えたのだけど

話は面白おかしく、ざつくばらんな性格みたいで

とても好感が持てた。

『離婚はなかなか力があるもんだよね。

実は僕もいろいろ経験してるからわかるんだけど・・・。

でもさあ、どうなの？

その、元旦那さんというか、まだ一応旦那さんか（笑）・・・

見返すぐらい貴方

素敵になつてみたら！？』

『あ、はい・・・。』

（ま、そりゃさあ・・・。）

『今の貴方を見てみるとね・・・』

社長は大きな目で私をまじまじと見ながら

『率直にいうとね。』

なるほど・・・育児してたんだろっかなあ。

主婦してたんだろっかなあ・・・

って思える雰囲気も少しまだ持ち合せてるわけ・・・。

ちよっとね、その髪型にしても、もっと貴方には

似合うものがある気がするんだなあ。

髪型ひとつでガラリとイメージが変わると思うんだよ！！

思い切って変えてみたらどお？』

『そっ、そうですか・・・』

（あゝもう散々・・・。そお出来るものならやりたいよっ！！）

『だけどお・・・これからあ

働くことによつて、いろんな可能性が広がると思うからね・・・。

だからこそ、是非、貴方を応援したいと思うんだ！！

ウチのほうで働いて頂けたらと思うんだけど

どうですかね？（笑）・・・』

『えっ！！？』

ほんとにですか？！』

信じられなかったけど、私は採用になった。

仕事始めは、

私が近々引越す予定があると伝えたら

それが片付き次第ってことにしてくれた。

とりあえず三ヶ月間は研修期間で、すぐ近くの

デパートの中にある店で働くことになった。

『もしこれから時間空いてたら、さっき僕と一緒にいた

お姉さんがいるでしょう？あの人と一緒に制服にする服

選んどいてもらえないかなあ。』

こうして、その日のうちに制服まで選んだ。

三ヶ月といえど、働く以上はその店の服で
トータルコーディネートする為、私の制服代は
約5万位になった。
マイナス5万からの出発は確かに厳しかったけど
大きなショップ袋を抱えて帰る
私の気分は明るかった。

情と傷

かずやが帰ってきて、採用になったことを話した。

そしたら早速、制服見せてって言うから見せたのだけど

『．．．．．。なんか．．．．．』

『なんかなによ？』

『いや．．．俺からしたら、ようわからん服やな．．．。

なんかちよつと陰気くさあないん．．．。』

『．．．．．。』

かずやにわかってもらえんでも全然構わんわっ（笑）』

『で、いつからあ？どこで働くわけなん？』

『．．．．．。えつとお．．．。』

それなあ、会社にもう一回連絡してみたらハッキリ決まるんよな。

でもな．．．近いうちにどつか．．．。』

『そうなん。』

何気なくごまかしてしまった。

ご飯を食べ終わって、私は食器を洗っていた。

なんか電話が鳴ってるような気がして水を止めた。

電話の鳴る音はもう聞こえなかったんだけど

かずやが出たのか、切れたのか．．．。

出たとしたら誰と話してるんだろっ．．．。

気になった私は、静かに音を立てないよう

部屋のほうに歩いていった。

かずやの声が聞こえた。

『はい。』

『はい。そうです。』

『はい．．．それは．．．。』

返事はそんな感じばかり。

しばらくそんな繰り返しの後、

『わかりました。

今すぐ出ます。

えっとお、

三分くらいで行けると思います。』

『それじゃ、僕のほうから声かけさせてもらいます。』

『ロータリーに・・・

グレーのインフィニティーですね。

わかりました。

それじゃ。』

(・・・・・・・・！！！！！！！！！！)

私が部屋に飛び込むのとはほぼ同時に

かずやがジャケットをつかんで部屋を出て行こうしていた。

『待って！！待って！！かずや！！お願い！！』

私を振り払って、出て行こうとするかずやを必死で引き止めた。

『あや！！話せ！！俺いかなあかん！！行くなって約束したんやけん

！！』

『私！！絶対行かすわけにいかん！！

絶対行かんでえ！！お願い！！お願い！！』

かずやの約束した相手は徹だった。

徹がかずやを呼び出した・・・

それがどういことなのか

私には大体察しがついた。

徹がそんな無茶をするとは思わない。

だけど、徹は力ツとなると

喧嘩っ早いところがあった。

やせているとはいえ身長180センチ以上の徹は

到底かなう相手とは思えない。

かずに手を出すとは限らないけど、

そうなってしまうんじゃないかと・・・。

だからどうしても！！

どうしてもかずやを行かせたくない！！

かずやは私を振り払おうとしたが、出来ないと思ったのか

『あや！！聞け！！』

といって、とりあえず私を抱きかかえるようにしてしゃがむと

『俺は大丈夫やけん！！とにかく待つといてくれ！！』

ここで俺が行かんかったら逃げたと思われる！！

やけん、ちゃんと話してくる！！

な、あや！！心配せんでええけん！！』

その瞬間、かずやは飛び出していこうとした。

私はかずやの両足にしがみついて、かずやは見事にひっくり返ってしまった。

『だめっ！！お願い！！私が徹に電話するっ！！』

頼むから・・・それからでもいいでしょ！！

もしそれでも行くなら・・・

帰ってきた時・・・私はここにはおらん！！』

私は泣きたいのをグツとこらえて受話器をとった。

『もしもし・・・。』

『もしもし徹・・・』

『今日は、おねえに用はね〜！！』

『知つとる！！』

彼氏出ていくとこやったけど私が止めた！！

どうしても、アンタに会わすわけにはいかんのんよ！！』

『俺とそいつの話じゃ！！とにかく来させっ！！』

『今日はとにかく帰って！！お願い！！』

終わりの見えない押し問答を何回か繰り返していた。

『もしもし？・・・お姉さん？』

『・・・。。』

『もしもし・・・しおりです。もしもし・・・。』

『もしもし・・・しおりちゃん？！！』

『はい！！私です。』

すみません、突然……。

実は……徹がカッカッしながら出てくもんで……心配で……ついてきてたんです。

ですけど、もう今日は一緒に帰りますからあ。

お姉さん、安心してください!!」

その途端、私は泣き出してしまった。

『ごめんね。いろいろ迷惑かけてるみたいで……。

ほんとに……。』

『私……正直、お兄さんとお姉さんは仲良さそうに見えてたんで……。

こうなってること、ほんとにはビックリしてます。

だけども、仕方ないですよ……。

シユンもカヨも元気ですよ。

ほんとに可愛いです!!

お姉さん……また帰って来て下さい……。

待つてますから……。

それまで……元気でいてくださいね……。』

途中からしおりちゃんは涙声になった。

『もしもし……。』

徹だ。

『もしもし……。』

『おねえ……。』

シユンとカヨの気持ちがわかるか!?

……。。

アイツらのこと思ったら俺は……。

おめえらのこと絶対許せれん!!』

『……。』

電話はプツリと切れた。

その後、私もかずやも二人で

泣いて泣いて、泣いた。

家族と接触を断っていた私にとって
皮肉にも徹が接触してくれたことで
家族をも巻き込み

どんだけ悲しませ、傷つけているのか・・・。
ここに来てやつと思ひ知らされたのだった。

それなのに私は・・・。

かずやと別れる道を選ばなかった。

家族の情をないがしろにした上、傷つけることを選んだ私。
だから、その代償はあまりにも大きすぎたんだ。

兆し

『あや．．．親に．．．金頼んだん？。』

『うん．．．。徹から？』

『うん。』

『それでここ出るつもり．．．。ええとこないかなあ．．．。』

『一緒に探さんかだ．．．。な？』

『うん．．．。』

あんな．．．私、生理来たで。』

『そつか．．．。』

その夜は、それだけ話しただけ。

いつの間にか眠ってしまった。

次の日のお昼、かずやは帰ってくるなり

『あや！！次の休みに不動産行くで！！』

って言った。

知ってる不動産に、もう連絡したとかで．．．。

不動産のことなんて全くわかんない私は、

正直、助かる！！とは思ったんだけど

でも、かずやと一緒にここを出るってことが

どうも気持ちの中で、まだ引つかかっているような．．．。

なんだか複雑な思いがしていた。

次の休み、かずやが連れてってくれたのは

岡大の近くの、古い小さい不動産。

いかにも学生対象っていう物件ばかりが張り出されてる。

かずやに引つ張られるように、中に入った私だったんだけど

その途端、思わず立ちすくんでしまった。

学生らしき男の子が、一人、

ガンガン不動産屋の男性に叱られまくってたからだった。

慌てて一人の別の男性が

『いやあゝすみませんねえ。どうぞっ!!こっちかけて!!』
って私達を促して、イスに座らせたけど、なんだか気が気じゃなくて。

それでも、かずやは淡々として

『電話で問い合わせした沢本ですけど・・・』
って切り出した。

そしたらすぐ三枚くらい用紙をその男性は私達の前に並べた。
今日、全部の物件見に行ってもらって構わないんだけど、
特に、行ってみてほしいところがあるって勧めてきた。

大家さんが、案内してくれるからってことで・・・。
部屋の間取りも悪くなさそうだし、家賃もさほど高くなかった。
場所も今の家から一番近い。

それじゃあつてことになり、
早速私達は出かけた。

着いたらすぐに、大家さんらしき男性と、すごい小さくて
ぬいぐるみみたいなヨークシャテリアを抱いたおばあちゃんが
私達を出迎えてくれた。

『不動産から連絡が来たんで待つとりました。
どうぞ!!』

そういつて、大家さんはコーポの一階の自室に
案内してくれると、コーヒーを入れながら

『近いうち結婚されるそうで(笑)・・・
籍はまだ入られてないんですねえ』。

いつの予定?』

(え?!)

戸惑う私の横で、かずやが

『10月に結婚するんで・・・。籍はまだです。』

って応えた。

なんで!?!と思ったんだけど、

かずやがそういうことにしとこ!!って

言わんばかりに私のほうを見て

『なっ！！』

って言った。

大家さんはこのコーポとすぐ横のめっちゃ古い
おんぼろ長屋とその奥の一戸建てを所有してて
さっきのおばあちゃんは長屋の唯一の住人だと話してくれた。
奥の一戸建ては家族連れが入ってるって。

私達にはこのコーポの二階の奥の部屋を見てほしいと言った。
手前の部屋は、韓国籍の男性が借りてるんだけど、
ほとんどが留守だと言った。

その後、大家さんがその部屋を案内してくれたんだけど
思った以上に広くてとても綺麗だった。

『空き部屋だけど、掃除はかかさんからね。』

あちこち見て回る私達に大家さんは常に付き添って
常にそう言った。

そんな大家さんがわずらわしいとは思いつつ

部屋のことはとても気に入った私。

かずやもそれは同じみたいだった。

そんな私達を察したのか

大家さんは、いつ入ってもらっても構わないと
言った。

私も仕事に行きやすいし、かずやの仕事場もすぐ近く
この間取りでこの家賃で・・・。

おまけに今まで車で出かけるのに

駐車場まで10分も歩いてたのに、これからは真下に
車が置けるわけで、さらに駐車場代も込みなんて
部屋を見終わって階段を降りると

また長屋から犬を抱えておばあちゃんが出てきた。

かずやはすぐさま寄ってって、おばあちゃんに

話しかけると、その犬を抱っこさせてもらってはしゃいでいた。

私はというと、確かに可愛い！！とは思いつつも
眺めるだけで十分だった。

大家さんが

『奥さん、どうかなあ！？』

あなた方が気に入って決めてくださるんなら

めんどくさい手続きとかは省いて、すぐ入れるように
私から不動産に言いますけど・・・。」

（奥さん！？・・・。）

そう呼ばれて多少戸惑った。

確かにいいと思う。

ただ、私としては、ご近所なんていらなかった。

隣は何をする人ぞ・・・。

そんな場所にポコンと、はまりたかった。

人付き合いは出来れば無いほうが理想。

『ええ、そうですね・・・。』

そういつて、次の返事をしない私に

業を煮やしたのか、大家さんは

『ご主人、今ねえ、奥さんにお話したんだけど・・・。』

結局かずやに同じことを話出した。

『あや！！ここでえんだろ！？』

俺はここで全然かんまんけん！！』

『うん。まあ・・・。』

大家さんは即座、電話を掛けにいった。

その後、もう一度不動産に戻り

必要な書類を渡され、必要な金額の説明を受けた。

それでも20万程度は飛んでいく。

致し方ないけど、なんだか悲しくなった。

そんな私を尻目にかずやはすごく嬉しそうに

あのおばあちゃんの抱えてた犬のことを

私に話した。

犬のことなんて、どうでもよかった。

まさかそのことが私に

関わってこようなんて想像もしてなかったし・・・。

だけど、そもそもこの日から

兆しはあったのかもしれない。

流れのままに

次の日の朝から私は電話の仕事を再開させた。
ほんとに余裕のない生活……。

新しい生活のためにも少しでも稼ぎたい。

稼げる自信はなかったけど、とにかくとつかかるしかない。
この仕事、サクラといえど、やっぱり緊張する。
ブランクが開くと尚更だった。

（こんな朝っぱらからいるかなあ……。）
そんな思いで、ツーショットに入っただけど
いる！！いる！！いる！！

ガチャ切りの洗礼も受けながらも、

何とか何人かを繋ぎ合わせながら私は

何となく調子を取り戻し始めた。

（まあ、こんなもんか……。）

電話をとりあえず切って再度かけ直してみる。

そうすると、今の稼動分が、金額になって聞けるのだ。

『今月の貴方のツーショット金額は……』

325円です。』

（はあ……！？そんだけかよ……。）

気持ちは萎えまくりながらも、またツーショットに進入。

『おっ！！おつかれさん！！どお今日の調子は！？』

『まあ、最低つてとこっすかね……。』

こういう客には、あえて否定しない。

『こんな時間でも客おるん？』

『おるよ。』

繋がったのはトラックの運転手。

トラックターミナルで待機中らしかった。

決して話しやすい人ではなかったから

私も大して面白い話題も提供出来ず、

いつ切られるかと思いつながら相手してたんだけど
一向に切られることもなくズルズルと話続けた。

そうしてたら、プチって突然切れてしまった。

イタタタ！！耳痛い。

時計を見たら、とつくにお昼過ぎ。

慌ててかけ直してみた。

325円が5750円に跳ね上がったた。

（有難うございます！！ほんとに感謝。）

ちようど、そこへ、かずやが帰ってきた。

帰ってくるなり、かずやは

『あや、この土曜日の夜に引っ越すけんな。』

今日、社長にも奥さんにもそう言うといいたけん。』

『はっ！？』

でも、なんか書類とかあつたでしょ？

保証人いるみたいなのも言うつつたし……。』

『あ、それなんけどな。』

うちの親が保証人なってくれるらしいけん。

俺、今日、親に電話したんよ。

絶対、親には、社長か奥さんが連絡入れる。

どっちみち俺らのこと、すぐ知れるし……。』

『でっ、でもスナリかずやの親は、ええって言うたわけ?!』

『なんかゴチャゴチャ言うたよ（笑）』

やけど、今、住んどるとこは追い出されるわけやけん、

とにかく保証人にはなってくれ……。って頼んだけどな。

まっ、結局親父がええよって。

あやのことはな、そのうち結婚するけんって言うといたわ。』

『なんか……。そんなことでええわけなん?!』

『えんちやうで!!』

それで土曜の夜、樋口が手伝ってくれるらしんよ。

あや・・・なんやったらもう、仕事行き始めてもかんまんよ!!
後のことは俺に任せときゃえゝし。』

『・・・・・・・・』

私の知らない合間に、かずやは着々と進めていつてしまう。

何だか状況に流されるままって感じの自分の立場が嫌だった。

保証人の件は、実際どうしようかと悩んでいた。

コレだけは母に頼んでも多分駄目だろうと思った。

結局、父に頼まなきゃいけないんだろうと・・・。

だけど、取り合ってくれるかどうかさえわからなかったし。

結局そのまま、かずやの親が保証人となり、私達は新居へと引越したのだけど

そのことも、後にかずやにとっては大きな痛手の一つになってしまった。

もうこの時点から、私達の歯車は狂い始めてたのだろう。

かずやに後押しされたこともあって、

その日のうちに会社のほうに連絡を入れた私は、

次の日から仕事に行くことになった。

そうになると、仕事のことしか考えられなくなって

結局私は、流されてしまったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5873e/>

箱愛

2010年10月21日08時24分発行